

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(189)

主要地方道願娃川辺線（知覧道路）道路改築事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅱ）

たか つき  
高 付 遺 跡

（南九州市川辺町）

2017年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

## 序 文

この報告書は、主要地方道類娃川辺線（知覧道路）道路改築事業に伴って、平成25年度及び平成26年度に実施した南九州市川辺町野崎に所在する高付遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡は、縄文時代から近世に至る複合遺跡であり、多くの遺構・遺物が発見されました。

縄文時代では、指宿式土器を中心とした縄文時代後期の遺物が多く、少数ながら中期から晩期の遺物まで幅広く出土しました。なかでも、磨消縄文を施す、北久根山式土器の出土は耳目を集めたところです。

弥生時代から古墳時代の調査では、同時代の移行期に当たると考えられる中津野式や成川式の土器が出土し、当時の土器の変遷を考える上で良好な資料が得られました。

古代以降の調査では、土師器や、青磁、白磁などの中国製陶磁器が大量に出土し、隣接する馬場田遺跡との関連性を伺わせる資料が出土しました。

これらの遺構・遺物は、万之瀬川の支流である野崎川に近い微高地の縁辺であるという立地条件や、この地が古くより他地域との交流が盛んであったことを裏付けるものであると考えられます。

本報告書を県民をはじめ多くの方々にご覧いただき、地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値をご理解いただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

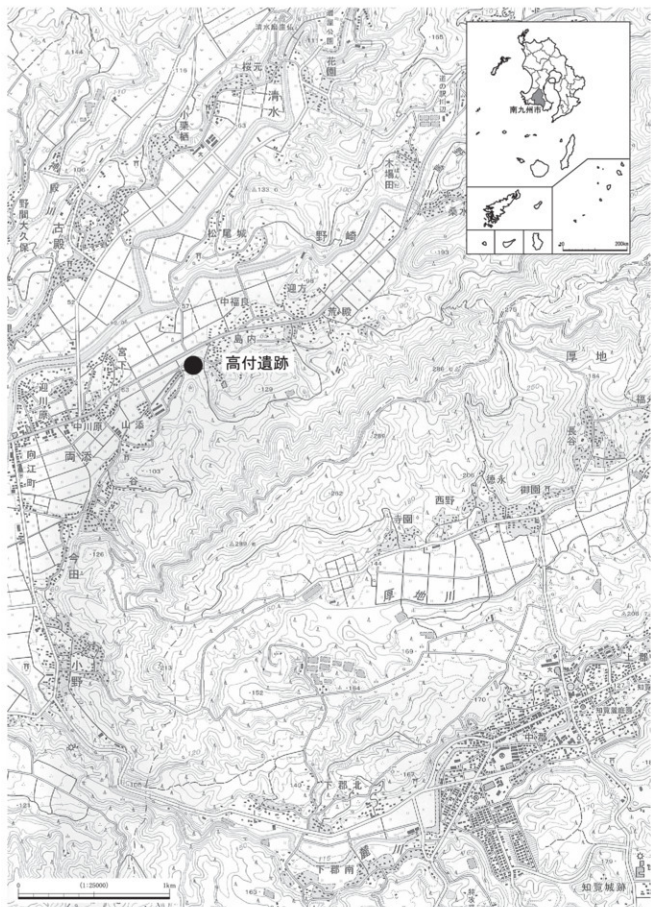
最後に、調査にあたり、ご協力をいただいた県土木部道路建設課、南九州市教育委員会、並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成29年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 福 山 徳 治

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	たかつきいせき							
書名	高付遺跡							
副書名	主要地方道額娃川辺線（知覧道路）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	（Ⅱ）							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	189							
編著者名	有馬孝一							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たかつきいせき 高付遺跡	かごしまけん 鹿児島県 みなみきゅうしゅうし 南九州市 あまなべちやう 川辺町	46223	431	31° 23' 53"	130° 24' 54"	2013.05.07～ 2013.06.27 2013.12.02～ 2014.01.28 2014.11.04～ 2014.11.27 2015.01.07～ 2015.01.21	4,754	主要地方道 額娃川辺線 (知覧道路) 道路改築事業 に伴う記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高付遺跡	散布地	縄文時代  弥生時代 古墳時代 古代・中世 近世	土坑   掘立柱建物跡 ピット群 溝跡 土坑	深浦式 岩崎上層式、指宿式 丸尾式、北久根山式 黒川式 石鏃、スクレイパー 打製石斧、磨製石斧 ハンマー、磨石 蔽石、石皿 中津野式 成川式、ミニチュア土器 土師器、青磁、白磁 青花、中国陶器 国内産陶器、染付 硯、滑石加工品 輪羽口、円盤状土製品				
遺跡の概要	高付遺跡は、縄文時代中期から近世に至る複合遺跡で、縄文時代後期の遺物を中心に多くの遺物が出土した。なかでも磨消縄文を施す遺物が出土したことは耳目を集めることとなった。その他の時代では、隣接する馬場田遺跡との関連を伺わせる中国製陶磁器の出土が注目される。							



遺跡位置図

# 例 言

- 1 本書は、主要地方道頭桂川辺線（知覧道路）道路改築に伴う高付遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南九州市川辺町野崎に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は、平成25年5月7日～平成25年6月27日、平成25年12月2日～平成26年1月28日、平成26年11月4日～平成26年11月27日、平成27年1月7日～平成27年1月21日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成26年度・平成27年度及び平成28年度に実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた記号は「TAK」である。
- 7 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、国土交通省が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 10 発掘調査における写真の撮影は、各年度の調査担当者が行った。
- 11 遺構図、遺物分布図の作成及びトレースは有馬、辻が整理作業員の協力を得て行った。
- 12 出土遺物の実測・トレースは、有馬、福永が整理作業員の協力を得て行った。
- 13 自然科学分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 14 遺物の写真撮影は、辻、吉岡が行った。
- 15 本書の編集は有馬が担当し、執筆分担は次の通りである。

## 第I章 辻

## 第II章 辻、有馬

## 第III章 第1節 有馬

### 第2節 有馬

### 第3節 1 有馬、福永

#### 2 有馬

#### 3 有馬

#### 4 有馬




## 第IV章 文頭に記載

## 第V章 有馬

- 16 本報告書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

## 凡 例

- 1 土器の量量の計測にあたり、現況で計測可能であったものは( )を付さずに計測値を表記した。
- 2 観察表内の( )の表記は、残存状況の良好なものについて図面上で反転復元を行い口径・底径が推測できたもの、器高については口縁からと底部からの残存高である。
- 3 土器実測図調整痕表示について

調整痕種		実測図表示例	留意点
ナ	工具ナデ		・工具幅を明瞭に
	ナ デ		・ナデ幅を明瞭に
ハケメ			・工具幅を明瞭に ・始点終点の表示 ・切り合い関係の重視
ミガキ			・ミガキ痕の重なり
指頭圧痕			・指幅の明示

#### 4 実測スケール

- 土器・土製品は、1/3で記載している。
- 石器・石製品は1/1, 1/2で記載している。

#### 5 遺物の出土状況のドット表示について

取上番号を付されたものについて表示している。掲載遺物は黒色で、未掲載遺物はグレーで表示している。

# 目次

序文  
報告書抄録  
例言  
凡例

第1章 発掘調査の経過 .....	1
第1節 調査に至るまでの経過 .....	1
第2節 事前調査 .....	1
第3節 本調査 .....	1
第4節 調査の経過 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境 .....	5
第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	5
第3章 調査の方法と成果 .....	9
第1節 調査の方法 .....	9
第2節 層序 .....	10
第3節 調査の成果 .....	13
第4章 自然科学分析 .....	55
第5章 総括 .....	61
写真図版 .....	63

# 挿 図 目 次

## 遺跡位置図

第1図	グリッド配置図及び周辺地形	4
第2図	周辺遺跡位置図	6
第3図	基本土層図	10
第4図	G・H-2・3区北側、H-2～4区西側、J-9・10区西側土層断面図	11
第5図	J-10区南側、G～J-18・19区南側土層断面図	12
第6図	縄文時代遺構配置図(1)及び1号土坑検出状況	13
第7図	縄文時代遺構配置図(2)	14
第8図	2号土坑検出状況及び2号土坑内出土遺物(1)	15
第9図	2号土坑内出土遺物(2)	16
第10図	縄文～古墳時代の遺物出土状況(1)	17
第11図	縄文～古墳時代の遺物出土状況(2)	18
第12図	縄文時代の土器(1)	20
第13図	縄文時代の土器(2)	21
第14図	縄文時代の土器(3)	22
第15図	縄文時代の土器(4)	23
第16図	縄文時代の土器(5)	24
第17図	縄文時代の土器(6)	25
第18図	縄文時代の石器(1)	26
第19図	縄文時代の石器(2)	27
第20図	縄文時代の石器(3)	28
第21図	縄文時代の石器(4)	29
第22図	縄文時代の石器(5)	32
第23図	土器出土状況及び弥生・古墳時代の土器(1)	33
第24図	弥生・古墳時代の土器(2)	34
第25図	弥生・古墳時代の土器(3)	36
第26図	古代以降の遺構配置図(1)	37
第27図	古代以降の遺構配置図(2)	38
第28図	掘立柱建物跡1号検出状況	39
第29図	掘立柱建物跡2号検出状況	40
第30図	3～5号土坑検出状況	41
第31図	6～8号土坑検出状況	42
第32図	溝1・2検出状況、溝2内出土遺物及びピット内出土遺物	43
第33図	古代以降の遺物出土状況(1)	44
第34図	古代以降の遺物出土状況(2)	45
第35図	包含層出土遺物 土師器	46
第36図	包含層出土遺物 土師甕	47
第37図	包含層出土遺物 青磁	48
第38図	包含層出土遺物 白磁・青花・中国陶器	49
第39図	包含層出土遺物 中国陶器・中世須恵器・国産陶磁器	50
第40図	包含層出土遺物 その他の遺物	51



## 表 目 次

表1 周辺遺跡一覧表(1) ……………	7	表12 土師器・土師甕観察表 ……………	47
表2 周辺遺跡一覧表(2) ……………	8	表13 陶磁器観察表(1) ……………	52
表3 2号土坑内出土遺物観察表 ……………	17	表14 陶磁器観察表(2) ……………	53
表4 縄文時代の土器観察表(1) ……………	29	表15 中世須恵器観察表 ……………	53
表5 縄文時代の土器観察表(2) ……………	30	表16 近世陶磁器観察表 ……………	54
表6 縄文時代の土器観察表(3) ……………	31	表17 その他の遺物観察表 ……………	54
表7 縄文時代の石器観察表 ……………	31		
表8 弥生・古墳時代の土器観察表(1) ……………	35		
表9 弥生・古墳時代の土器観察表(2) ……………	36		
表10 溝2内及びピット内出土土師器観察表 ……………	44		
表11 ピット内出土青磁観察表 ……………	44		

## 図 版 目 次

発掘調査風景及び土層断面 ……………	63	縄文時代の石器 ……………	72
遺物出土状況及び縄文時代の遺構 ……………	64	弥生時代～古墳時代の遺物 ……………	73
成川式土器出土状況及び遺構検出状況(1) ……………	65	古代～中世の土師器 ……………	74
遺構検出状況(2) ……………	66	中世の青磁・白磁 ……………	75
2号土坑内出土遺物 ……………	67	中世～近世の陶磁器及びその他の遺物 ……………	76
縄文時代の遺物(1) ……………	68		
縄文時代の遺物(2) ……………	69		
縄文時代の遺物(3) ……………	70		
縄文時代の遺物(4) ……………	71		

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（以下、道路建設課）は、額娃川辺線（知覧道路）改築事業に先立って、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

これを受けて県文化財課が、平成21年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に高付遺跡等の所在が判明した。

この結果をもとに、道路建設課・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の3者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において試掘調査を実施することとした。

高付遺跡の試掘調査は、県文化財課が埋文センター及び南九州市教育委員会の協力を得て、平成24年1月10日に実施し、2か所のトレンチで遺構を確認した。そこで、平成25年5月7日から、試掘時に用地解決していなかった部分とトレンチ周辺の確認調査を行った。その結果、縄文時代～近世の遺構・遺物を確認し、調査対象面積が延べ4,754㎡となることがわかった。このことを受けて、再度3者で協議を行った結果、設計変更等が不可能であることから記録保存のための本調査を実施することとなった。

本調査は、埋文センターが担当し、平成25年度と平成26年度の2カ年にわたり本調査を実施することとなった。平成25年度の調査対象面積は、市道部分を除く4,422㎡であったが、鞍曲遺跡の調査を優先する必要性がでてきたことから、平成25年度は、4,164㎡を調査し、残り590㎡を平成26年度に調査実施することとなった。

平成25年度の調査は、平成25年5月7日から平成25年6月27日、平成25年12月2日から平成26年1月28日にかけて実施し、平成26年度の調査は、平成26年11月4日から平成26年11月27日、平成27年1月7日から平成27年1月21日まで実施した。これらの調査の結果、縄文時代から近世に至るまでの遺構・遺物等が発見された。

報告書作成作業は、平成26年度から平成28年度にかけて実施した。

### 第2節 事前調査

#### 1 分布調査

分布調査は、平成21年7月17日に、額娃川辺線（知覧道路）を対象に実施し、平成23年8月10日に、額娃川辺

線（霜出道路）を対象に実施した。高付遺跡は平成21年度の分布調査時に新たに発見された遺跡である。

### 2 試掘調査

試掘調査は、平成24年1月10日に実施した。調査は、対象地のうち用地解決した箇所についてトレンチを7か所設定し、重機及び人力で掘り下げた。その結果、2か所のトレンチで遺構が確認された。

### 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 南薩地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査者	県文化財課 文化財主事 中村 和美 鹿児島県立埋蔵文化財センター 調査第一課第二調査係長 大久保浩二
立会者	南薩地域振興局建設部土木建築課 技術主査 下馬場健一
調査協力者	南九州市教育委員会文化財課 主任主事 上田 耕

### 第3節 本調査

#### 1 平成25年度 確認・本調査（5月～6月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 南薩地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 井ノ上秀文
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 新小田 穰 調査課長 兼南の縄文調査室長 堂込 秀人 主任文化財主事兼 第一調査係長 東 和幸
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 浦 博司 文化財主事 辻 明啓
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主幹兼総務係長 有馬 博文 主査 下堂蘭晴美

#### 2 平成25年度 本調査（12月～1月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 南薩地域振興局建設部土木建築課
------	---------------------------------

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長	井ノ上秀文	
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長	新小田 穰	
	調査課長		
	兼南の縄文調査室長	堂込 秀人	13日
	主任文化財主事兼		14日
	第一調査係長	東 和幸	21日
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事	尾川 満	22日
	文化財主事	辻 明啓	6月
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主幹兼総務係長	有馬 博文	
	主事	池之上勝太	12日

### 3 平成26年度 本調査（11月、1月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 南薩地域振興局建設部土木建築課		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長	井ノ上秀文	
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長	中島 治	
	調査課長		
	兼南の縄文調査室長	前迫 亮一	
	第二調査係長	今村 敏照	19日
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事	辻 明啓	1月
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主幹兼総務係長	有馬 博文	

## 第4節 調査の経過

調査の経過については、日誌抄を年度ごと及び月ごとに集約して記載する。

### 調査の過程（日誌抄）

#### 1 平成25年度

- 4月
- 4日 現地協議（南薩地域振興局，県文化財課，埋文センター）。高付遺跡調査における事前調整及び優先調査範囲の決定。
- 22日～25日 表土剥ぎ及び調査環境整備。
- 5月
- 7日 調査開始。作業員オリエンテーション，安全対策及び調査環境整備。F～J-2～10区内に確認トレンチを設定。F～I-2～6区及びH～J-6～10区に遺物・遺構を

確認。F～H-15～18区確認トレンチ設定。F～H-15～18区で遺物・遺構を確認し，隣接するH～J-17～19区にも広がりが見られ調査範囲を広げる。G・H-15・16区は削平をうけているのが確認されたため調査終了。F～J-17～19区本調査。

- 13日 現地調査（東係長）
- 14日 安全パトロール（有馬係長，大久保係長）
- 21日 現地協議（南薩地域振興局，県文化財課，埋文センター）
- 22日 現地指導（井ノ上所長）
- 6月
- 市道の迂回路工の可能性が出てきたので，G～I-5・6区も調査開始。F～J-17～19区本調査。縄文後期包含層一部残存，土坑複数確認。
- 12日 安全パトロール（新小田次長，池之上主事，東係長）
- 27日 調査終了。G～J-17～19区引き渡し。
- 12月
- 2日 調査開始。作業員オリエンテーション，安全対策及び調査環境整備。H～J-7～10区調査，ビット検出。F～H-2～4区調査，遺物・遺構確認。年末年始対策の環境整備及び養生。
- 橋脚工事との兼ね合いで作業中止（4日，10日）
- 19日 安全パトロール（玉利文化財主事，永濱文化財主事）
- 1月
- F～H-2～5区調査，遺物取り上げ及び遺構実測。
- 橋脚工事との兼ね合いで作業中止（7日，8日）
- 14日 遺跡見学（川辺町史談会）
- 20日 鞍曲遺跡現地協議（南薩地域振興局，県文化財課，埋文センター）
- 2月
- 3日 ベルトコンベア等鞍曲遺跡へ移動。
- 4日 作業員を高付・鞍曲遺跡にわけて調査開始。G～I-4・5区調査。
- 鞍曲遺跡の25年度調査予定範囲の拡大により，12日で高付遺跡の調査終了。26年度調査にわたっての養生を実施。
- 7日 現地指導（井ノ上所長，堂込課長）
- 10日 現地調査（東係長）
- 2 平成26年度
- 11月
- 10日 調査開始。F～H-2～5区調査。掘り下

	げは、初日で完了。遺構精査を行い、土坑・ピット・溝跡を確認し調査。
27日	調査終了。市道部分は、ボックスカルバート設置時の道路構造物除去時に実施することで、南薩地域振興局及び工事業者と確認。
1月	
19日	市道部分調査。包含層は削平されており、IV層上面のピット9基を調査。
21日	調査終了。南薩地域振興局および工事業者への引き渡し完了。

## 第5節 整理作業の経緯

整理作業は、平成26年度から28年度にかけて埋文センターで行った。整理作業及び報告書作成作業の経緯は次の通りである。

- 平成26年度・水洗い、注記、接合、一部遺物実測及び遺構図面チェック、トレース
- 平成27年度・分類、接合、遺物実測、拓本、実測図チェック
- 平成28年度・石器実測、遺物トレース、遺構配置図作成、レイアウト、遺物写真撮影、原稿執筆

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

### 1 平成26年度 報告書作成

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 南薩地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 井ノ上秀文
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 中島 治 調査課長 兼南の縄文調査室長 前迫 亮一 第二調査係長 今村 敏照
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 辻 明啓
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主幹兼総務係長 有馬 博文

### 2 平成27年度 報告書作成

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 南薩地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会

調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 福山 徳治
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼調査課長 前迫 亮一 総務課長 有馬 博文 第二調査係長 今村 敏照
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 浦 博司 文化財主事 福永 修一
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター 総務係長 脇野 幸一

### 3 平成28年度 報告書作成

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 南薩地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 福山 徳治
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼調査課長 前迫 亮一 総務課長 高田 浩 第二調査係長 今村 敏照
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事兼専門員 有馬 孝一 文化財主事 福永 修一
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター 総務係長 脇野 幸一

#### 調査指導

報告書作成指導委員会	平成28年11月24日 前迫次長他8名
報告書作成検討委員会	平成28年11月30日 福山所長他7名



第1図 グリッド配置図及び周辺地形

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

南九州市川辺町（以下川辺町）は、鹿児島県の南西部にあり、薩摩半島のほぼ中央部に位置している。

行政的には、東は知覧町（現南九州市）、西は加世田市（現南さつま市）、南は枕崎市と境をなしており、北は鹿児島市と金峰町（現南さつま市）に接している。

川辺町の境界は、東が東経130度29分22秒、西が東経130度18分48秒、南が北緯31度18分17秒、北が北緯31度28分18秒である。東西に最大幅約16.6km、南北に約18.8kmであり、総面積は約127.53km<sup>2</sup>である。まわりを山に囲まれた盆地で、四方から中央部に向かって次第に低下し、途中で高台をつくりながら、南薩随一の穀倉川辺盆地を形成している。海がなく、盆地であるために昼夜の気温の差が大きい。夏は気温も高く、降水量は6月と9月に多い傾向がある。冬は、1月の最低気温が零下3℃で、一般に霜は強いが積雪は少ない。

川辺町の地形は、山地・台地・低地に大別される。そのうち薩南山地をなしている山脈は北から南へ走り薩摩半島の背骨になっており、支脈は四つに分かれ、ほとんど並行しながら次第に低下しつつ走っている。四つの山脈は、鎌塚山（586.3m）、高峰熊が岳（589.7m）、山犬ヶ岳（488m）、北瀬戸山岳（532.6m）を主峰とする。

台地は、これらの山脈に沿って標高60m以上150m以下の間にあって、町内の畑地の大部分を占めている。低地は、万之瀬川の流域である広瀬川流域と大谷川流域の二つに分かれ、標高平均60m以下で両河川による沖積層である。ほとんどが水田地帯で一部が市街地や住宅地となっている。

高付遺跡は、川辺町のほぼ中央部で知覧町境に接する野崎字高付に所在する。万瀬川の支流である野崎川にむけて、ゆるやかに傾斜する標高約50mの微高地の縁辺に立地している。F～J-2～10区は、土地改良による削平を受けている部分も多く層の堆積状況も良好ではないが、縄文後期～近代までと考えられる遺構・遺物が検出・出土した。E～J-15～18区も谷川が流れる真横であり、層の堆積状況は良好ではないが、縄文後期の遺構・遺物を検出・出土した。

### 第2節 歴史的環境

川辺町内の遺跡は町内全域に分布し、中でも万之瀬川流域や川を眺望できる台地上に密に分布する。

町内最古の遺跡は、後期旧石器時代のナイフ形石器や台形石器、剥片尖頭器等を出土する宮ノ上遺跡・津フジ遺跡・背野平遺跡・上桑持野遺跡・萩久保遺跡等があり、背野平遺跡ではA T層上位から7基の縄群が発見され、

24000年程前の生活痕跡を伺い知ることが出来る。また宮ノ上遺跡では、石器製作址が多数検出され総数770個体を超える石器接合資料が得られ、当時の石器製作技術や製作に関わった人の行動などが具体的に検討できる貴重な資料として、石器及び接合資料107点が平成23年4月に県指定有形文化財に指定された。

縄文時代になると遺跡数も飛躍的に増加し、具体的活動の痕跡を多くの遺跡で見ることが出来る。町内の縄文時代でもっとも古い縄文時代草創期の遺跡が鷹爪野遺跡で隆帯土器と共に舟形状配石灯が発見されている。また、その上位では早期の前平式土器が磨製石鏃と共に堅穴住居を伴って発見されている。小崎遺跡で押型土器に伴って食料残滓の貝殻や獣骨が発見され、荒多遺跡・上桑持野遺跡・鳴野原B遺跡等では塞ノ神式土器が主体で遺跡を構成している。万之瀬川沿いの廻り溜遺跡や南田代遺跡・古市遺跡からは曾畑式土器や深浦式等の縄文時代前期から中期にかけての遺構・遺物が発見され、時代と共に遺跡の立地条件が変化していく様相を見ることが出来る。次に田中堀遺跡からは、指宿式土器や市来式土器が多数出土し、貯蔵穴と見られる土坑も検出されている。

弥生時代から古墳時代の遺跡については、万之瀬川や神殿川等の河川流域やそれに隣接する台地から発見される傾向が見られる。古市遺跡で弥生時代前期の堅穴住居跡が2軒発見されている。弥生中期になると寺山遺跡で大規模なV字溝が構築され、万之瀬川を見下ろす台地上に環濠集落が存在した可能性が高くなっている。出土品には丹塗土器等の北九州系の土器も含まれ、広範な交流の様子が伺える。弥生時代後期から古墳時代前期の集落構造や葬制の様相が堂園A遺跡・堂園B遺跡で明らかになった。

『倭名類聚抄』によると、古代には「加波乃部」と訓じられ河辺郡に属し、稲積・川上の二郷があったとされる。現在の川辺町は、河辺郡川上郷と阿多郡嘉例郷に属していたとされる。

中世では、宝光院跡・松尾城跡・馬場田遺跡などが近隣の遺跡として存在する。馬場田遺跡では矩形を呈すると思われる幅約3.4m、深さ約1.2mの大溝や小溝が検出され、区画内の一角と区画外に掘立柱建物跡がそれぞれ1棟発見された。当時の有力者の居館跡と思われる。

参考文献は紙面の都合上、割愛させていただきます。



第2図 周辺遺跡位置図

表1 周辺遺跡一覧表(1)

遺跡番号	遺跡名	所在地	地形	遺跡の時代	主な出土遺物等	備考
1	馬込	鹿児島県南九州市川辺町清水	—	古墳		
2	尾立	鹿児島県南九州市川辺町清水尾立	台地	弥生	弥生土器片散布	
3	横塚	鹿児島県南九州市川辺町神殿横塚	台地	古墳	成川式	平成6年度県サンオーシャンリゾート分布調査
4	田代	鹿児島県南九州市川辺町田代小学校上	山麓傾斜面	縄文(早期)	前平式	
5	仁田平道	鹿児島県南九州市知覧町西元仁田平道	台地	縄文	土器	1998年農政(1998年農政水山とは、同一箇所)
6	草葉	鹿児島県南九州市川辺町野間草葉ほか	台地	縄文～古墳		平成10年農政
7	中原	鹿児島県南九州市川辺町古殿	—	古墳, 古代		
8	鳴之原	鹿児島県南九州市川辺町神殿鳴野原	台地	縄文(早期)	石板式、塞ノ神式、石鏡、磨製石斧、磨石、砥石	平成10年土木、遺理セ(47)、鹿理セ(156)本報告書
9	古殿諏訪跡	鹿児島県南九州市川辺町古殿内跡	台地	古墳, 古代, 中世	成川式、土師器、須恵器、白磁、青磁、染付	鹿理セ(108)
10	堂ノ上	鹿児島県南九州市川辺町清水	—	古墳		
11	北中横	鹿児島県南九州市川辺町清水田北中横	低地	平安～中世(鎌倉)	土師器、青磁、白磁	平成10年農政分布調査
12	雲朝寺跡	鹿児島県南九州市川辺町清水板元	低地	—		
13	板馬場	鹿児島県南九州市川辺町清水板馬場	低地	古墳～中世(鎌倉)	成川式、青磁、白磁	
14	川辺氏居館跡	鹿児島県南九州市川辺町清水小栗橋	低地	中世		(町)昭和33年3月1日
15	木場田	鹿児島県南九州市川辺町清水木場田	台地	縄文		
16	東ヶ迫	鹿児島県南九州市川辺町清水東ヶ迫	台地	縄文, 古墳		
17	飯集	鹿児島県南九州市川辺町清水飯集	山麓傾斜面	縄文, 古墳, 古代		
18	大田尾館跡	鹿児島県南九州市川辺町野間尾形久保	台地	中世		
19	龍泉寺跡	鹿児島県南九州市川辺町野崎北原	低地	—		
20	宝光院跡	鹿児島県南九州市川辺町清水宇都	山麓傾斜面	中世(鎌倉)～近世		川辺町教育委員会(昭和33)
21	中宮	鹿児島県南九州市知覧町仙田山	台地	中世～近世		
22	松尾城跡	鹿児島県南九州市川辺町野崎松尾城	丘陵	中世(鎌倉)	空塚、曲輪	(町)昭和33年6月1日
23	全勝寺跡	鹿児島県南九州市川辺町野崎松尾城下	低地	—		
24	野崎陣跡	鹿児島県南九州市川辺町野崎陣平	台地	中世		
25	野間陣之尾城跡	鹿児島県南九州市川辺町野間陣之尾	台地	中世	中世山城	
26	馬場原	鹿児島県南九州市川辺町平山馬場原	台地	縄文(早期), 中世	集石遺構, 前平式, 土師器, 白磁, 青磁	平成6年度確認調査
27	馬場田	鹿児島県南九州市川辺町両語	台地	中世		南九州市教委(3)
28	高付	鹿児島県南九州市川辺町野崎宇高付	平地	縄文(後期), 古墳, 中世		平成25年, 26年調査
29	平山城跡	鹿児島県南九州市川辺町平山天神	河岸段丘	中世(室町), 近世		町指定文化財(史跡), 川辺町教委(1)
30	玉泉寺跡	鹿児島県南九州市川辺町平山本町	低地	—		
31	矢掛松	鹿児島県南九州市川辺町両語宮下	低地	縄文		昭和42年3月25日, 市指定文化財
32	向城寺跡	鹿児島県南九州市川辺町両語山岳	山麓傾斜面	—		
33	厚地城跡	鹿児島県南九州市知覧町厚地塚之内	山麓傾斜面	古代, 中世	空塚(12～13世紀)平安末～鎌倉初	鹿児島県市町村別遺跡地名表560年
34	野石城跡	鹿児島県南九州市知覧町厚地野石	山頂傾斜面	中世	曲輪	知覧町郷土史S57年
35	山石城跡	鹿児島県南九州市知覧町厚地宮谷山	河岸段丘	古代	空塚(奈良時代以前のものと推定)	鹿児島県市町村別遺跡地名表560年
36	塚之内	鹿児島県南九州市知覧町厚地塚之内	—	中世, 近世	土器片, 土師器, 染付	平成5年5月発見
37	中牟田	鹿児島県南九州市知覧町厚地中牟田	沖積地	弥生, 古墳	弥生土器, 須恵器(古墳～平安?)	知覧町郷土史S87年
38	西ノ前	鹿児島県南九州市知覧町厚地西ノ前	台地	弥生	弥生土器, 青磁片(鎌倉～室町)	知覧町郷土史S88年
39	御園	鹿児島県南九州市知覧町厚地御園	山裾	中世	成川式土器, 青磁	平成6年10月県サンオーシャンリゾート分布調査
40	前田	鹿児島県南九州市知覧町厚地前田	沖積地	弥生, 古墳	弥生土器, 土師器, 須恵器	鹿児島県市町村別遺跡地名表560年
41	平山	鹿児島県南九州市川辺町平山六丁	後背湿地	古墳		平成6年度農政分布調査
42	ヤシキデラ	鹿児島県南九州市知覧町厚地ヤシキデラ	山麓傾斜面	縄文(早期)	石板式, 吉田式, 弥生土器	鹿児島県市町村別遺跡地名表560年



表2 周辺遺跡一覧表(2)

遺跡番号	遺跡名	所在地	地形	遺跡の時代	主な出土遺物等	備考
43	金藏塚	鹿児島県南九州市知覧町厚地金藏塚	台地	—	土器片	平成6年10月県サンオーシャンリゾート分布調査
44	大福寺跡	鹿児島県南九州市川辺町小野	低地	—		
45	高小野	鹿児島県南九州市川辺町小野高小野原	丘陵	古墳		
46	ツタッキ	鹿児島県南九州市知覧町厚地葛巻	台地	弥生	弥生土器	知覧町郷土史S57調査
47	荒尾	鹿児島県南九州市知覧町厚地荒尾	低地	古墳		平成6年度農政分布調査
48	寺園	鹿児島県南九州市知覧町厚地寺園	低地	中世		
49	尾神ヶ山	鹿児島県南九州市知覧町尾神ヶ山	台地	縄文(早期)	貝殻・土器	昭和51年頃調査、知覧町郷土誌
50	寺師殿城跡	鹿児島県南九州市知覧町打木比良	台地	中世	空罎、曲輪	鹿児島県市町村別遺跡地名表S60年
51	堀内平	鹿児島県南九州市知覧町堀内平	河岸段丘	古代～中世	青磁、土師器、染付	平成5年5月発見
52	牧野畑	鹿児島県南九州市知覧町牧野畑	台地	古墳	土師器	知覧町郷土史 S57年
53	衣月ヶ城跡	鹿児島県南九州市川辺町小野二反尾鼻	台地	平安～中世		
54	嶺山陣跡	鹿児島県南九州市川辺町宮嶺山	台地	—		
55	牧野	鹿児島県南九州市知覧町牧野下	台地	縄文(早期)、弥生～近世		
56	牧野(東)	鹿児島県南九州市知覧町牧野(東)	河岸段丘	中世	青磁、白磁、土師器	平成5年5月発見
57	金山水車(轟製煉所)跡	鹿児島県南九州市知覧町牧野	河川	近現代	埴壇、輪羽口、踏鉄、鑿、陶磁器、ガラス瓶類、軍用食器、陶製配水管	
58	安田	鹿児島県南九州市知覧町下郡北安田	台地	縄文(早期)		
59	小原	鹿児島県南九州市知覧町小原	台地	古墳	成川式土器	平成6年10月県サンオーシャンリゾート分布調査
60	豊玉姫神社	鹿児島県南九州市知覧町宮園	微高地	弥生	石包丁	鹿児島県市町村別遺跡地名表S60年
61	彼岸田	鹿児島県南九州市知覧町彼岸田	沖積地	古墳	弥生土器、土師器	耕地整地中に出土、知覧町郷土誌
62	竹崎	鹿児島県南九州市知覧町竹崎	河岸段丘	中世、近世	青磁、白磁、土師器、陶器	平成5年5月発見
63	宮東	鹿児島県南九州市知覧町宮東	河岸段丘	古代～中世	土器、土師器、青磁、須恵器	平成5年5月発見
64	橋元B	鹿児島県南九州市知覧町橋元	沖積地	—		鹿児島県市町村別遺跡地名表S60年
65	橋元A	鹿児島県南九州市知覧町橋元(前田製材所付近)	微高地	縄文、弥生、古墳		昭和37年上之芝蔵・川野治雄氏試掘調査、知覧町郷土史S57年
66	白川・厚村	鹿児島県南九州市知覧町白川・厚村	河岸段丘	古墳～中世	成川式土器、青磁、須恵器、土器片	平成6年10月県サンオーシャンリゾート分布調査
67	須田木	鹿児島県南九州市知覧町須田木	河岸段丘	縄文、古代、中世	縄文土器、須恵器、青磁	平成6年10月県サンオーシャンリゾート分布調査
68	嶺山古陣跡	鹿児島県南九州市知覧町西元陣の比良	山頂斜面	中世	鐵骨器	
69	露宿	鹿児島県南九州市知覧町露宿	台地	縄文～中世	須恵器、土器、矢じり、青磁	鹿児島県市町村別遺跡地名表S60年
70	地頭所	鹿児島県南九州市知覧町地頭所	河岸段丘	古墳、古代、近世	陶器、染付	平成5年5月発見
71	有村	鹿児島県南九州市知覧町有村	河岸段丘	中世	青磁(椀花皿)	平成5年5月発見
72	射手園	鹿児島県南九州市知覧町射手園	微高地	縄文(前期、後期)	縄文土器、須恵器、鉄滓、骨	昭和31年河口貞徳・佐多純義発掘日本考古学年報9
73	露月田	鹿児島県南九州市知覧町露月田	河岸段丘	旧石器～近世	土器、土師器、陶磁器	平成12・15年度調査
74	天神山	鹿児島県南九州市知覧町天神山	台地	縄文、弥生、古墳	縄文土器、弥生土器、土師器	日本考古学年報9、昭和31年発掘
75	小坂ノ上	鹿児島県南九州市知覧町小坂ノ上	台地	古代	須恵器、鉄滓、骨	日本考古学年報9、昭和32年発掘
76	古城跡	鹿児島県南九州市知覧町古城	山地	中世	空罎、土罎	鹿児島県市町村別遺跡地名表S60年
77	平屋敷	鹿児島県南九州市知覧町(中部地区)	平地	中世、近世		
78	栄仙寺跡	鹿児島県南九州市知覧町	平地	中世、近世		寺社跡
79	西福寺跡	鹿児島県南九州市知覧町	平地	中世、近世		寺社跡
80	川辺地頭飯塚跡	鹿児島県南九州市川辺町平山	平地	中世、近世		館跡
81	清水磨屋仏	鹿児島県南九州市川辺町清水	—	中世		仏教遺跡

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

#### 1 調査の方法

平成24年度に行われた試掘調査を受け、平成25年5月7日から6月27日にかけて、試掘調査時に条件整備が整わず、トレンチ調査できなかった部分と試掘調査で遺構の確認された1トレンチ・4トレンチ周辺の確認調査を実施した。

その結果、縄文時代から中世の遺物包含層が確認され、総面積4,754㎡を対象とする本調査を実施することとなった。調査は6月で一旦終了し、同年12月2日から再度調査を開始したが、同事業区間内の鞍曲遺跡の調査を優先することとなり、平成26年1月28日で一部の調査を残し、平成25年度の調査は終了した。

平成26年度は平成26年11月4日から11月27日、平成27年1月7日から1月21日の2度にわたる調査を経て調査対象部分の全ての調査を終了した。

本調査を行うにあたって調査区の設定は、遺跡全体をカバーできるように世界測地系に則り基準となるグリッドを設定した。調査区に近いグリッド杭H-11（世界測地系座標X-177500 Y-55600）とグリッド杭H-16（世界測地系座標X-177550 Y-55600）を先行して打設し、2つの杭を結んだ線、及びその延長線を中心に設定した。具体的には北側から南側に向かって1・2・3・・・、西側から東側に向かってA・B・C・・・と調査区割を設定した。調査の方法は重機（バックホー）によってI層（表土）を除去した後、ジョレンや山鉤、ねじり鎌等を使用して人力での掘り下げを行った。地層の詳細については後述するが、II層・III層ともに縄文時代の遺物から、少数ながら近世の遺物を包含しており、再堆積層の様相を呈していた。念のため堆積状況を確認しながらII層・III層を掘り進め、遺物は出土状況の写真撮影を行ったのち、残存状況良好なものについては取上番号を付して、トータルステーションにて座標及び標高を記録し、その他については、層位ごとのグリッド一括で取り上げを行った。

各層の出土遺物の内容にほとんど差異は見られなかったもののII層・III層で明らかな色調差があったことから、ここでわずかながら時期差があるものと考え、II層上面・III層上面・IV層上面で遺構検出のための精査を実施し、遺構の有無の確認を行い、遺構の認定を行った。

各遺構は、検出状況の写真撮影・図面作成を行った後、遺構の状況に応じて埋土観察用ベルトを残し掘り下げを行う、半載して掘り下げを行うなどの対応をした。掘り下げ中に出土した遺物は、出土状況の記録・取り上げを行い、埋土状況を写真撮影・記録したのち、完掘し、図

面を完成し完掘状況の写真撮影を行った。

調査の結果、調査区のG-3～5区西側、I・J-9・10区、E～H-15～18区の東側一部を除き、IV層上面からV層にかけて削平を受けており、包含層も失われ、遺構の検出もほとんど出来なかった。

#### 2 遺構の認定と検出方法

検出された主な遺構はIV層上面において検出された。おおむね黒色土を埋土とする径20cm～30cmの円形の掘り込みが多数検出され、ビットと判断した。上位に堆積する地層がプライマリーなものではないため、掘り込み開始面は不明で、遺構内遺物も異なる時期の遺物が混在するため、明確な時期設定も不可能であった。

同じくIV層上面で検出された長軸1.5mの不定形を呈する掘り込みは、遺構内から炭化物が出土したため、科学分析を実施し縄文時代後期の年代が得られた。

さらに、長軸1.15mの楕円形の掘り込みでは縄文時代後期の遺物が集中して検出された。検出面において土師器小片が数点出土したが、上層遺物の潜り込みの可能性が高いと判断し、縄文時代後期の遺構と判断した。

これらの他にも、土坑が3基検出されたが、遺構内遺物の出土が遺構検出面に近く、上層遺物の潜り込みの可能性が高く、また遺物の出土していないものもあり、詳細な時期認定は保留した。

III層上面、II層上面で検出された遺構については、遺構検出面が再堆積層の可能性が高いため、近世以降のものとして判断した。

## 第2節 層序

高付遺跡の基本層序は次のとおりである。

I	Ia層	表土
	Ib層	表土 白色バミスを多く含む
	Ic層	表土 白色バミスを少し含む
II	II層	赤褐色砂質土
III	III層	黒褐色砂質土
IV	IV層	明褐色火山灰土 (アカホヤ火山灰) 約7,300年前の鬼界カルデラ噴出物
V	V層	にぶい黄褐色砂質土

第3図 基本土層図

高付遺跡は、平成24年1月に実施した試掘調査で7か所の下層確認トレンチを設定し、遺構、遺物の有無を確認した。

その結果、地層の堆積は水田と畑地において状況が異なり、1トレンチ・4トレンチを設定し確認を行った畑地として利用されていた若干標高の高い微高地に遺構・遺物が残存することが確認された。

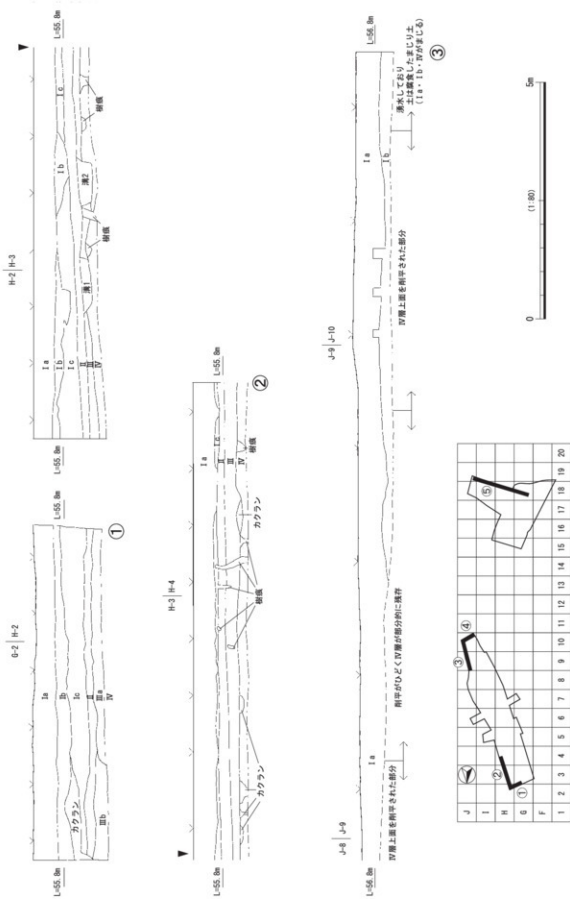
遺跡は、東西を小丘陵、南側に鎌塚山から高岡へと続く山嶺に囲まれ、遺跡南側の山裾を源流とする小河川によって開析された平地部に立地する。この河川は、現在でも豊富な水量をもち、灌漑用水に利用されながら西流し万之瀬川に注いでいる。

遺跡中央付近は、トレンチ試掘調査により、砂層・砂礫層が堆積していることが確認されており、この河川により分断されていることが判明した。

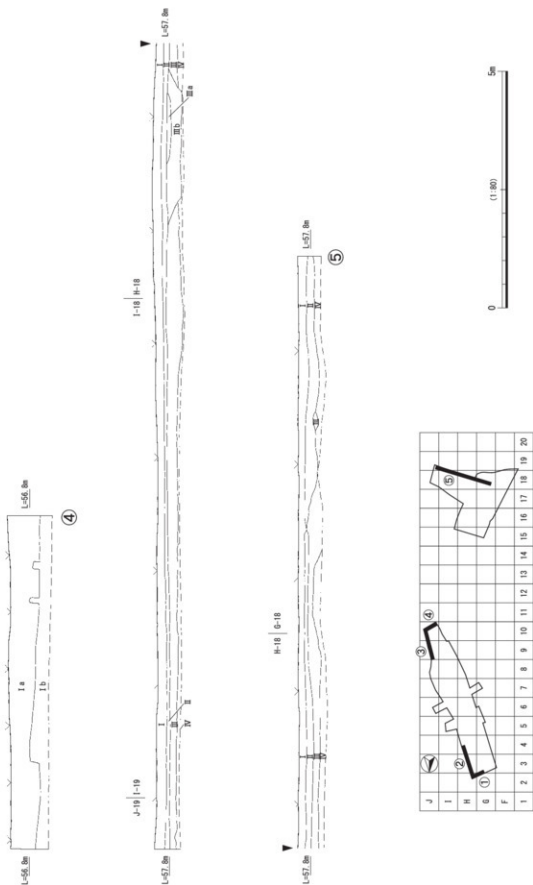
このことから、調査区は大きく2か所に分かれることとなった。それぞれの調査区の地層堆積状況は、次のとおりであった。

調査区F～J-2～10区は、表土直下にIV層が見られるほど南側を大きく削平されていた。北側に向かうにしたがい、II・III層の包含層が見られるようになる。

調査区F～J-15～19区は、西側・南側及び北側部分を削平され、G～J-17・18区の東側に延びる部分のみ包含層の堆積が見られた。残存する包含層については、両調査区に違いは見られなかった。



第4図 G・H-2・3区北側、H-2~4区西側、J-9・10区西側土層断面図



第5图 J-10区南侧, G~J-18·19区南侧土层剖面图

### 第3節 調査の成果

#### 1 調査の概要

発掘調査は、試掘調査で遺構が確認された1トレンチ・4トレンチを中心とした、調査区G～J-2～10区とE～J-15～19区の二つの区画について行った。

遺跡は土地改良工事等のため、かなりの削平を受けており一部ではIV層アカホヤ火山灰までも喪失している状態であった。第2節でも述べたとおり、遺物包含層は、II層赤褐色砂質土・III層黒褐色砂質土の2枚を想定し調査を行ったが、両層に出土遺物の違いはなく、縄文から中世、わずかながら近世の遺物が出土するため、遺構は、上記の理由からII層上面・III層上面検出のものについては、遺構内遺物の如何に関わらず、時期不明として取り扱うこととした。IV層上面で検出された遺構については、埋土状況・遺構内遺物の出土状況等から時期判断できるものは、該当する時代で記載することとした。

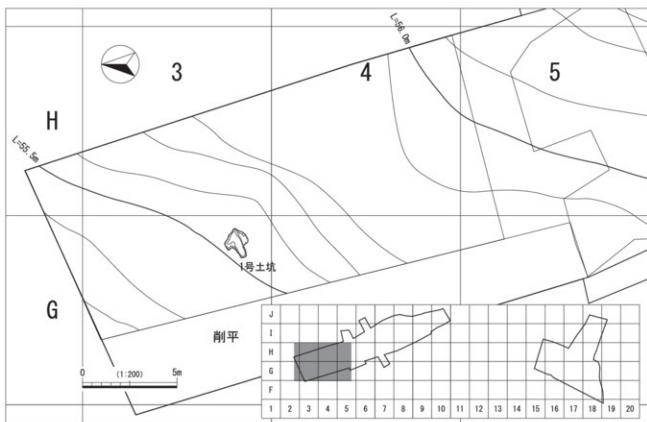
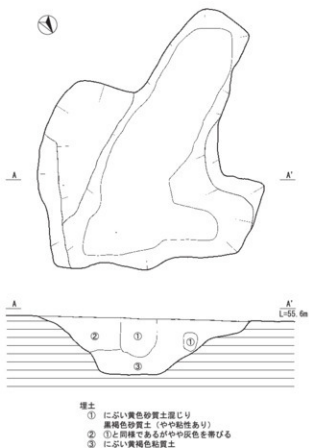
遺物については、出土層に関係なく時代ごとに整理し、資料提示することとした。

#### 2 縄文時代の調査

縄文時代の遺構は、G-3区で検出された1号土坑、J-18区で検出された2号土坑の2基である。

#### 縄文時代土器の分類

I類…口縁部が外反もしくは外傾し、口縁部形態には平口縁、波状口縁がある。外面文様は突帯文を主要



第6図 縄文時代遺構配置図(1)及び1号土坑検出状況

文様として、直線的モチーフを描く、縦位の文様区画に二条の突帯を用いる。またそこから斜位の突帯が施されるものも見られる。内面に貝殻連点文が施されるものも見られる。内外面共に丁寧なナゲ調整が行われる。

- II類…小片のため器形は不明である。文様は口縁下位に縦位の刻み目、口唇部に掛かるものもある。さらにその下位に棒状工具による横位の沈線が施されるものも見られる。
- III類…口縁部が外反、直口、わずかに内湾するものと多様である。文様は平行する二条の沈線を主体として、直線文、曲線文、入組文など様々であるが、小片主体のため全体モチーフが解るものは少ない。貝殻腹縁刺突の施されるものも見られる。
- IV類…器形の解る個体は出土していない。口縁下部のくの字に屈曲する部分の上下に、貝殻腹縁による斜位の刺突が連続して施される。胎土に金雲母を多量に混入する。
- V類…1点のみの出土であるが、沈線間に縄文を残す磨消縄文系の土器片である。胴部から頸部にかけての破片と思われる。
- VI類…深鉢は、口縁部が外傾するものと内傾するものがある。口縁に三角形の突起を持つものも見られる。器面は粗いナゲ調整を施すものと、条痕が残るものがある。浅鉢形土器は胴部が上位で張り、そろばん玉状の形状を呈するものもある。口縁部は胴部より大きなものと小さなもの二つがある。口縁部内面に稜線をもち、玉縁を呈する。

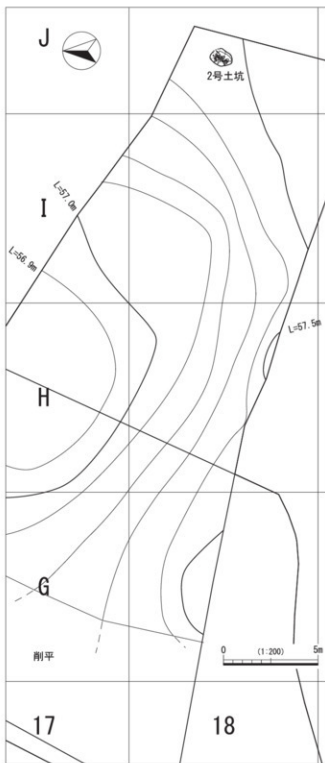
## 遺構

### 1号土坑（第6図）

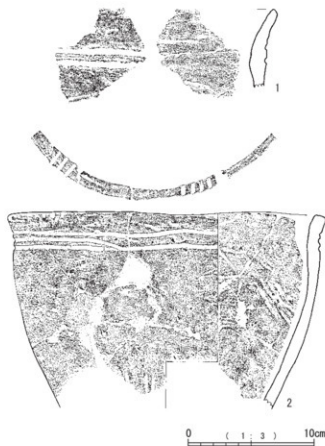
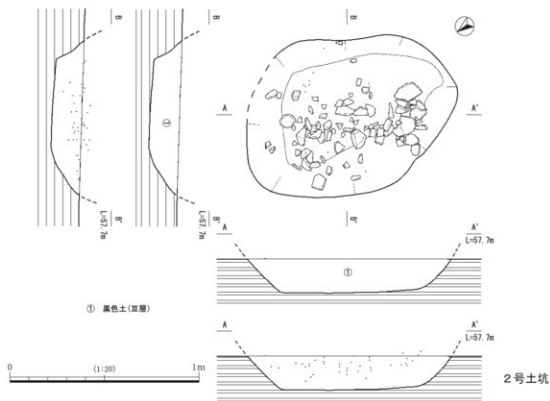
1号土坑は、G-3区、IV層上面で検出された。土坑の形状は、長軸約155cm、短軸約120cmの不定形を呈する。検出面からの深さは約30cmである。北東-南西に軸をとる130cm程度の土坑と西北西-東南東に軸をとる120cm程度の土坑がふたつ切り合っている可能性が考えられるが、検出面での切り合いは確認できなかった。埋土中から無文の土器小片と、底部片が出土しているが図化には至らなかった。埋土中から炭化物が採集され、科学分析の結果、縄文後期の年代測定値が得られたため、縄文時代後期の遺構と認定した。

### 2号土坑（第7図・第8図）

2号土坑は、J-18区、IV層上面で検出された。土坑の形状は、長軸約115cm、短軸約85cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは約17cmである。埋土中から108点の遺物が出土し、接合できたもの、大型のもの14点について図化した。2点の土師器小片が混入して



第7図 縄文時代遺構配置図（2）



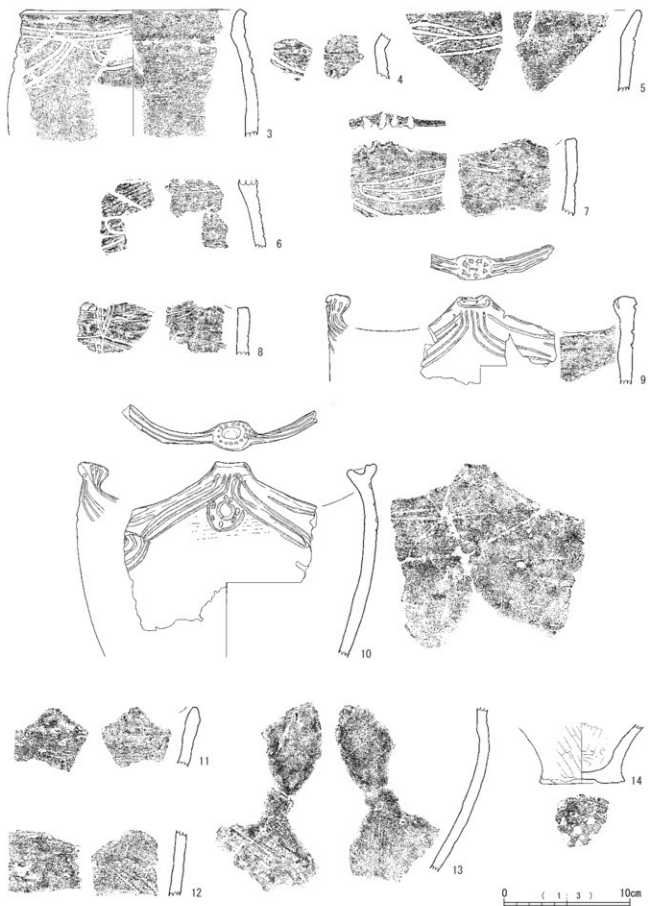
第8図 2号土坑検出状況及び2号土坑内出土遺物(1)

いたが、検出面直下であり、上位層堆積の際の潜り込みと解し、Ⅲ類土器のみ出土することから縄文時代後期の遺構と位置つけた。

#### 2号土坑内出土遺物(第8図・第9図)

1～14は、Ⅲ類土器と位置づけられるものである。1～11は、口縁部もしくは口縁部直下付近と考えられる破片である。1は、口縁部が外反し、口縁下位にややため沈線底部に棒状工具の擦痕が残る横位の2本沈線が廻る。2は、口縁部がわずかに外反しバケツ状を呈する器形で、口唇部は平坦である。口縁部直下に横位に平行する二条の沈線が廻り、下位の沈線が分岐し途中から三条に変化する。口唇部には、棒状工具による3～4本の刻みが2か所確認できる。3は、口縁部直下に横位の二条の沈線が廻り、さらにその下位に弧状に二条の沈線が施される。口縁部はほぼ直口し、横位の沈線付近からわずかに胴部が張る。4は、口縁部の屈曲部と思われる。3同様に屈曲部付近から弧状に二条の沈線が施される。5は、わずかに外傾する口縁部である。平行する二条の沈線が施され、途中で分岐している。6は、口縁屈曲部から胴部の破片である。屈曲部に横位の沈線が施され、その下位に流水文のような沈線が施される。外面に器面調整の貝殻条痕が残る。7は、口縁部波頂部片である。口唇部は平坦で、波頂口唇部に棒状工具で刻みを施す。8は、波状口縁の回み部にあたると思われる。そこ

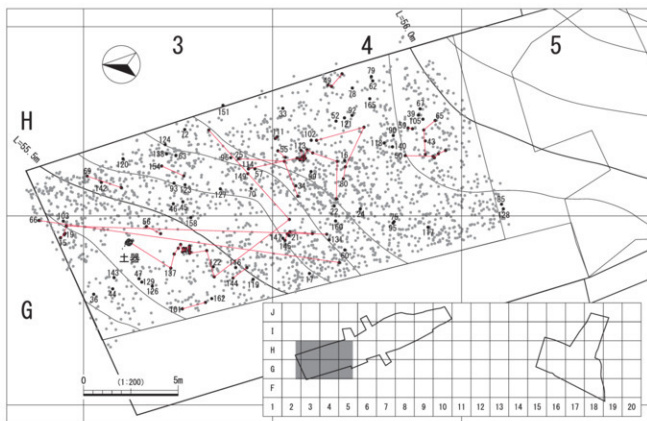




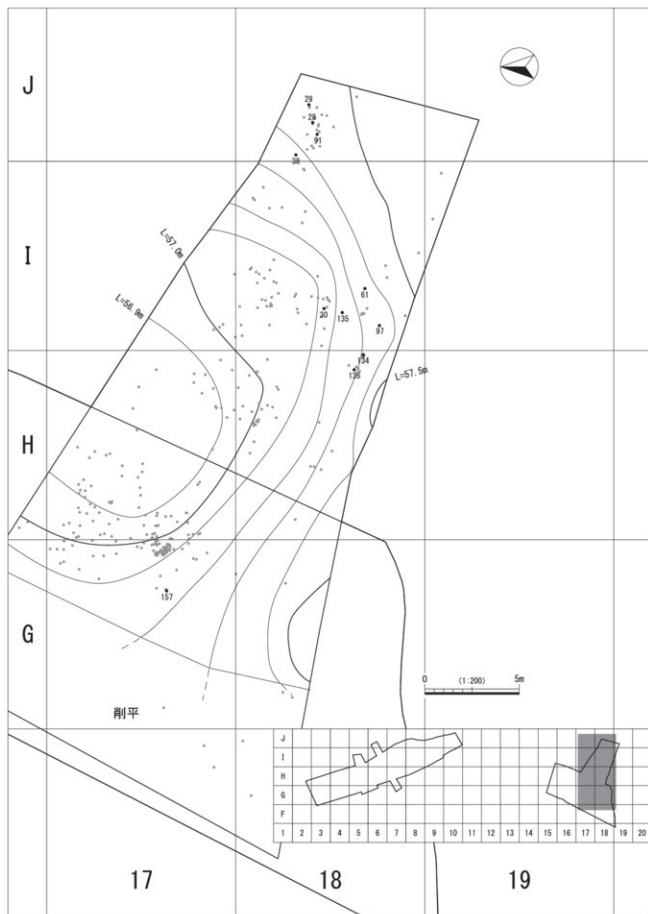
第9圖 2号土坑内出土遺物(2)

表3 2号土坑内出土遺物観察表

検出 位置 番号	出土 層	遺物名 フリット 系	層位	埋別	種類	部位	調整 (内面)	調整 (外面)	噴成 石 質	胎土			色調 (内面)	色調 (外面)	文様	寸法 (cm)			備考																																																													
										黒	赤	その他				口径	底径	高さ																																																														
1	SK7-1 SK7-20 SK7-26 SK7-44 SK7-80	SK7	-	笠筒	深鉢	口縁部	工具ナデ	工具ナデ	普通	○	○	-	赤赤褐色5YR5/6	褐色7.5YR4/6	波線	-	-	-	-																																																													
																				2	SK7	-	笠筒	深鉢	口縁部一 縁部	貝粒多量のち工具 ナデ	貝粒多量のち工具 ナデナデ	普通	○	○	赤色相	黄褐色10YR5/4	にぶい黄褐色 10Y5/2	波線、刻み	(25.6)	-	(15.6)	-																																										
																																							3	SK7	-	笠筒	深鉢	口縁部	工具ナデナデ	工具ナデ	普通	○	○	-	にぶい赤褐色 5YR4/4	赤赤褐色5YR5/6	波線	(18.2)	-	(10.2)	-																							
																																																										4	SK7-50	SK7	-	笠筒	深鉢	縁部	工具ナデナデ	ナデ	普通	○	○	-	赤赤褐色5YR5/6	黄褐色7.5YR5/6	波線	-	-	-	-			
																																																																														5	SK7-8	SK7
6	SK7-3	SK7	-	笠筒	深鉢	縁部	工具ナデ	貝粒多量、工具ナデ	普通	○	○	-	黄褐色10YR5/6	黄灰色2.5Y4/1	波線	-	-	-	-	-	-																																																											
																						7	SK7-9	SK7	-	笠筒	深鉢	口縁部	工具ナデ	工具ナデ	良好	○	○	-	赤褐色7.5YR5/6	褐色7.5YR4/2	波線、棒状工具 による刻み	-	-	-	-																																							
8	SK7-99	SK7	-	笠筒	深鉢	口縁部	工具ナデナデ	工具ナデナデ	-	○	○	-	黄褐色10YR2/1	にぶい黄褐色10Y5/2	波線	-	-	-	-	-	-																																																											
																						9	SK7-49	SK7	-	笠筒	深鉢	口縁部	工具ナデ	工具ナデ	普通	○	○	-	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 10Y5/2	波線、刺突文	(24.8)	-	(7.1)	-																																							
10	SK7-51 SK7-53 SK7-80 SK7-85 SK7-95	SK7	-	笠筒	深鉢	口縁部一 縁部	工具ナデ	貝粒多量のち工具 ナデ	普通	○	○	-	赤色相	にぶい褐色 7.5YR5/2	黄褐色10YR5/6	波線、刺突文	(23.8)	-	(15.5)	-																																																												
																					11	SK7-58	SK7	-	笠筒	深鉢	口縁部	工具ナデ	工具ナデ	良好	○	○	-	にぶい褐色7.5YR5/4	黄褐色10YR5/6	-	-	-	-	-																																								
																																									12	SK7-94	SK7	-	笠筒	深鉢	縁部	工具ナデ	工具ナデ	良好	○	○	-	赤色相	黄褐色7.5YR5/6	褐色7.5YR4/2	-	-	-	-																				
																																																													13	SK7-39	SK7	-	笠筒	深鉢	縁部	貝粒多量のち工具 ナデ	貝粒多量のち工具 ナデ	-	○	○	-	赤色相	にぶい黄褐色 10Y5/4	赤黄褐色10YR6/6	-	-	-	-



第10図 縄文~古墳時代の遺物出土状況 (1)



第11図 縄文~古墳時代の遺物出土状況（2）

を中心に平行二条沈線が縦横位に、内面には弧状に二条沈線が施される。9・10は、波頂部片である。平坦な口唇部に二条から三条の沈線を施し、波頂部には丸い飾りが付き、中心に凹みを付け、その周囲に細い棒状工具による連点を施す。外面には波頂部を起点として左右へ弧状に四条の沈線が延びる。10は、その下に円形の沈線を施し、その外側に半弧状の沈線を描き、その間に棒状工具による連点を施す。また、波頂部から口縁に沿って下った部分にも円形モチーフの文様を描いている。11～13は、無文の破片である。11は、波頂部である。12・13は、胴部片で貝殻痕の後ナゲ調整を行っている。14は、底部片で底部がやや鋭角に張り出し、胴部は反外気味に立ち上がる。底面には網代編み痕跡が残る。

## 遺物

### 土器 (第10図～第17図)

15～27は、Ⅰ類土器の口縁部から胴部片である。15は、口縁部に向かい外傾する器形で、平行する二条の縦位突帯間に針先ほどの縦位沈線を施し、突帯の外側には口縁部から斜位に同様の沈線が描かれる。内面は貝殻痕が残る。16は、波頂部である。波頂部から垂下する数条の縦位沈線と突帯、口縁に沿う二条の突帯と沈線、さらに斜位の突帯と沈線が外面に施され、内面口縁下位には、口縁に沿って貝殻連点文が付される。17は、16と類似する。18は、口唇部が平坦である。19は、口縁直下の突帯が一条で、内面は貝殻痕が残る。20～27は胴部片で、20は、口縁部に近いと思われ、反外気味の器形である。21～26は、類似した突帯と沈線の組み合わせ文が施される。27は、外面に貝殻腹縁によるギザギザの文様が施され、内面は貝殻痕が粗く残る。

28～32は、Ⅱ類土器である。28・29は、外面口縁直下に篋状工具による連続刺突が施される。30は、外面口縁直下の連続刺突に加え、口唇部、内面口縁直下にも同様の刺突を施す。さらに外面の連続刺突文の下位には幾何学的な文様が描かれる。31は、口縁に突起部を持つわずかな波状口縁の可能性が伺える。口唇外端部に棒状工具による刻みが施され、口縁下位には同様の工具で横位の沈線を四条施す。32は、文様構造的に31に類似するが、器壁が薄い。

33～79は、Ⅲ類土器である。33～64は、口縁部片である。33～40は、口縁下位に横位の平行2本沈線が廻るものと認識し分類した。33は、口縁部が外反し、太めで深い沈線である。内面はケズリ調整を行う。34は、太いが浅い沈線で、外面に調整の貝殻痕がわずかに残る。35～38は、口唇部が平坦である。35は、一部に飾りとして棒状工具による三条の刻みが施される。口縁下位の沈線はやや細く浅い。36は、外面に調整の貝殻痕が残るものと思われるが、小片のため判然としない。37は、胴部

に向かい斜位の沈線も確認出来る。38は、分岐する沈線が見られ、三条沈線である。39は、波頂部もしくは飾り突起になると思われる資料であるが、欠損し判然としない。40は、内面を削り方に調整している。41～47は、外面に幾何学的な文様が施される。41～44は口縁直下に一条沈線、その下位に逆三角形、三角形が描かれる。45・46は、小片のため全体モチーフは不明であるが、矩形を基調とした文様が描かれていると思われる。46は、内面に調整の貝殻痕が明瞭に残る。47・48は、波頂部である。47は、口唇部内面に刻みを施す。外面には波頂部を起点とした沈線が曲線的に描かれる。48は、口唇部に刻みを施す。49は、平口縁と思われる。欠損のため確認はできないが、口唇直下付近を取束点とする二条一単位の放射状の沈線を、二条一単位の弧状の沈線が囲む様に文様が展開する。50は、波状口縁の波頂部を一部含む破片で、波頂部口唇部内面に貝殻腹縁の刺突が施される。外面には47同様の手法で沈線が描かれ、そこから下位に平行二本沈線で鈎状の文様が描かれる。51も、波頂部付近の破片である。波頂部から延びていると思われる二条の沈線が見える。52は、口縁部が玉縁状を呈する。53は、文様モチーフは不明である。内面をケズリ調整する。54は、口縁部が、くの字状に屈曲する。文様は基本二条一単位の平行沈線が入り組んだものと思われる。55・56は靴形文の描かれた資料と想定している。胎土・沈線が34に酷似しており同一個体の可能性がある。57・58は、欠損のため不明であるが、矩形をモチーフとした突帯と捉えている。59は、欠損しているが破片右上に突起が付くものと思われる。59・60は、波状口縁と思われる。ジグザグモチーフの文様が下方に展開すると考えられる。61は、横W字状の文様が横方向に展開する。緩やかな波状を呈する口縁部と推測される。62・63は、貝殻腹縁刺突文を施す資料である。63は、わずかにキャリバー状の断面を呈する波状口縁の資料で、口縁屈曲部の上位に貝殻腹縁刺突を施す。また、波頂口唇部にも、同様の刺突がはいる。64は、内外面ともに貝殻痕が残れる。器形・文様等が不明瞭で、1点のみの出土のためⅢ類の中で取り扱った。

65～79は、胴部である。65は、外面に貝殻痕の調整痕を顕著に残し、靴形文もしくは矩形と曲線文の組み合わせが施文されると思われる。66は、口縁部に近いものと考えられ、横位の平行する二条沈線が観察できる。67は、内外面を非常に丁寧な工具ナゲ調整で整えている。68は、横位二条の沈線間に入り組み文を展開する。69は、靴形文と考えられる。70は、靴形文のモチーフであるが、若干、趣が異なり判然としない。71は、粘土紐接合部と思われ、内面に指頭圧痕が顕著に残される。72は、直線と曲線を組み合わせた文様が想定されるが、小片のため、展開する文様は不明である。73は、外面に弧状の

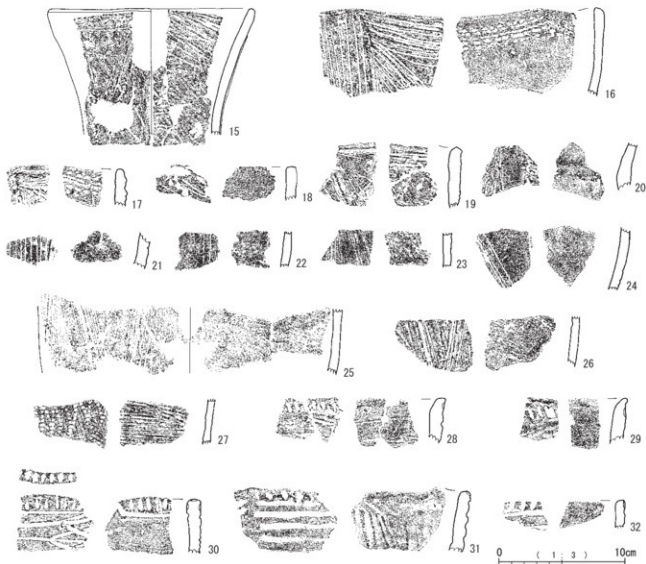
二条沈線が施される。端部が摩滅により不明のため、胴部としたが口縁部である可能性も考えられる。74は、胴部の屈曲が大きい器形である。屈曲部上位に鋭角な頂部をもった文様が描かれるが、モチーフの全容は不明である。75は、直線的な沈線が複雑に切り合っている。76は、平行する沈線間に、竹管状の刺突が施される。77は、相反する器形の一部で、沈線で区画された部分に細い棒状工具で刺突を密に行い、疑似縄文風仕上げられている。78・79は、貝殻腹縁刺突による沈線が施される。

80～82は、IV類土器である。胎土に金雲母が含まれるのが特徴的である。80は、斜位の貝殻腹縁刺突が残存部上位に見られる。81は、残存部下位がわずかに断面三角形に膨らみ、その上位に短い斜位の貝殻腹縁刺突が横方向に連続して刻まれる。さらにその上位には浅い沈線が斜位に施される。82は、断面形状は81同様で三角形

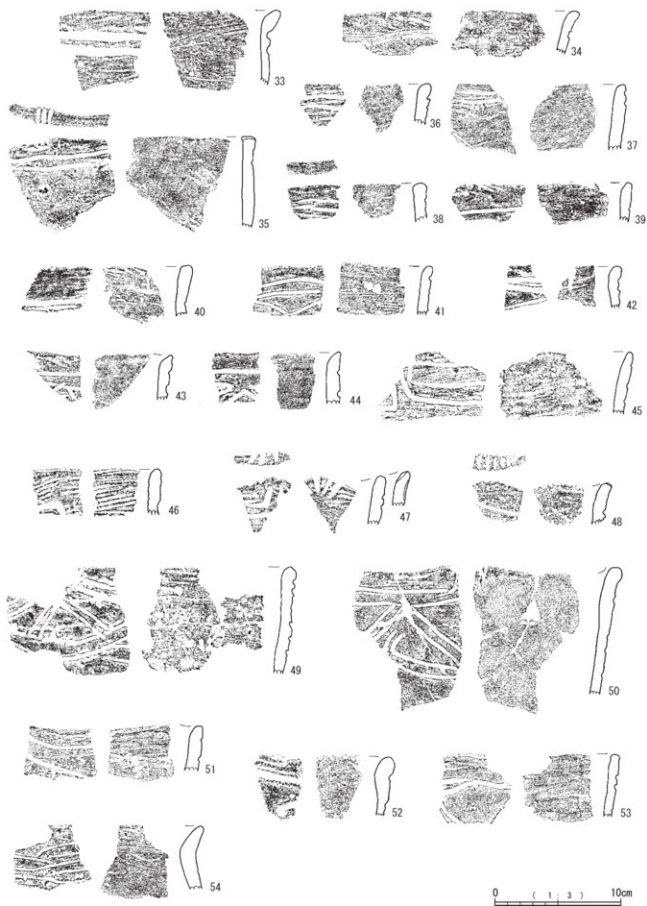
の膨らみの上下に短い斜位の貝殻腹縁刺突が横位に展開する。刺突の上位には浅い横位の沈線が施される。

83は、V類土器で肩部と思われる。三条の横位の沈線が廻り、沈線間には縄文が残る磨消縄文の手法がとられる資料である。

84～97は、縄文中後期の土器底部と思われるものである。84～89は、底部外面に組織痕が残るもので、84～88は、網代痕が明瞭に残るものである。84～86は、底部外面端部がわずかに外に張る器形である。89は、摩滅が激しいが一部に組織痕らしき痕跡が観察できる。90は、胴部内面に貝殻腹縁による調整痕が残る。91は、底部、胴部接合時の指頭圧痕が顕著に見られる。92は、底部外面にオオタニワタリと思われる葉痕が残される。胴部は外開き気味に立ち上がる器形となる。底部から胴部内面にかけて貝殻腹縁による調整痕が明瞭に残る。93は、92



第12図 縄文時代の土器（1）

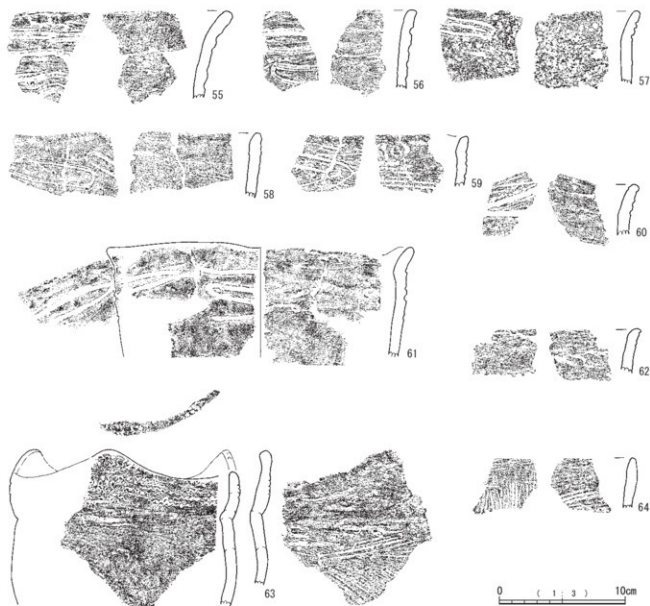


第13図 縄文時代の土器（2）

と同様の器形で、内外面共にナデ調整が行われる。94は、底部外面をナデ調整しているが、外周付近に網代痕らしき痕跡がわずかに残される。95は、底径の大きな個体である。96は、胎土に砂粒を多く含む。97は、底径に比べ、非常に厚みのある底部である。

98～116は、VI類土器である。98～104は口縁部で、深鉢もしくは粗製浅鉢と考えられる資料である。98・99は、口唇部が平坦で器壁がやや薄い。98は、わずかに外反する。99は、直口する。100～102は、口縁部が内傾する。100は、口縁端部がわずかに肥厚する。外面調整は、工具痕を残す粗い調整である。101は、口縁端部がわずかに先細り、口唇部は平坦となる。102は、器壁が厚手で口縁端部がわずかに外弯する。内面には貝殻腹縁によ

る調整痕が残る。103・104は、深鉢もしくは浅鉢の口縁突起部分である。105は、胴部片で、胴部に屈曲部をもち、口縁部に向かい内傾しながら曲線的に立ち上がる器形である。106～111は、器面をミガキ調整する精製の浅鉢である。106は、胴部で屈曲内傾したのち頭部から口縁は外傾する。口縁は、比較的長く口縁径が胴部径を上回る。口縁端部内面には沈線が廻る。107は、106と同様の個体と考えられる。108は、器形は106に比較的近いが、胴部屈曲から頭部までが長く口縁部の立ち上がりが短い。また、胴部、頭部の屈曲がきつく明瞭な稜線を有する。口縁径より胴部径が大きくなる。109は、口縁端部外面に沈線が廻る。110は、胴部屈曲部と考えられるもので、屈曲上位に沈線が一条はいる。111は、底部に小



第14図 縄文時代の土器（3）

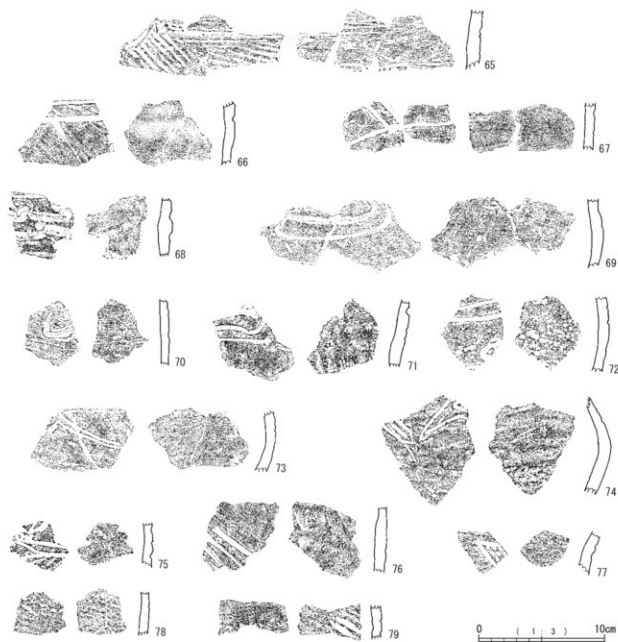
さな高台が付く。112～114は、粗製の浅鉢である。112は、外傾する直口口縁である。113・114は、口縁部断面が三角形を呈し内面に稜線を有する。器面調整が非常に粗い。114では口縁部外面に、成形前の粘土紐の形状がそのまま残る部分が見られる。115は、深鉢の底部で裾広がりの形状を呈する。116は、胎土・調整が深鉢に似ることからここに掲載した。補修孔と思われる加工痕が破断面に残る。

#### 石器（第18図～第22図）

石器については、供伴する土器が不明で時期特定が困難なため一括した。

117～122は、打製石鏃もしくはその未製品である。117～119は、縦長二等辺三角形の形状で、117は、深め

のかりを有するが、かり部はやや丸みを帯びる。118は、117同様の形状を呈するが、かり部、先端部が鋭利に仕上げられている。119は、前出のものと同様の形状と思われるが先端部、かり部の一部が欠損するため明確な形状はわからない。120は、表裏に行われる微細な調整剥離がほとんど看取できず、かり部の形状も左右で異なり、先端部が欠損し、断面も厚いことから製作途中で剥離に失敗し放棄された石鏃の未製品と考えられる。121も側縁の加工が粗く製作途中の未製品と思われるが、かり部が浅く弧状となる。122は、右側縁に細かな剥離痕が見られるものの、左側縁からの調整剥離で大きく欠損しており、その時点で製作を放棄した石鏃の未製品と思われる。123～125は、スクレイパーである。123は、粘

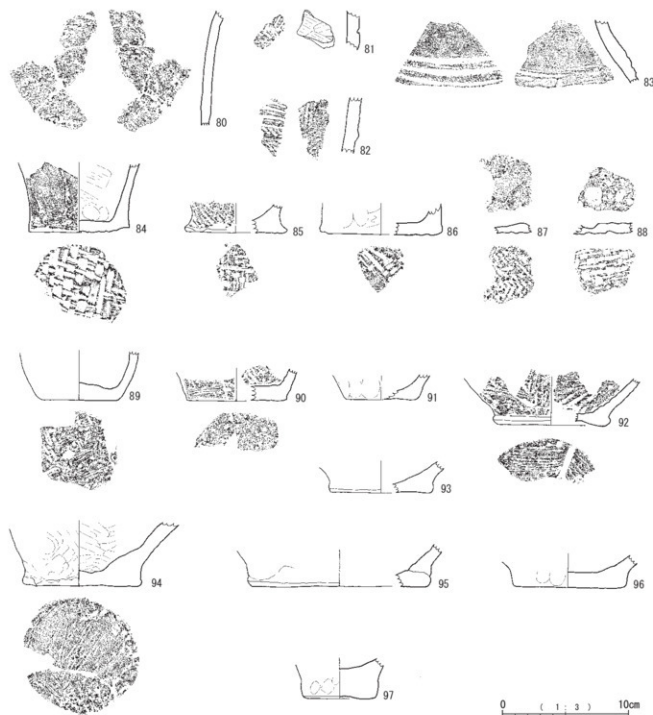


第15図 縄文時代の土器（4）

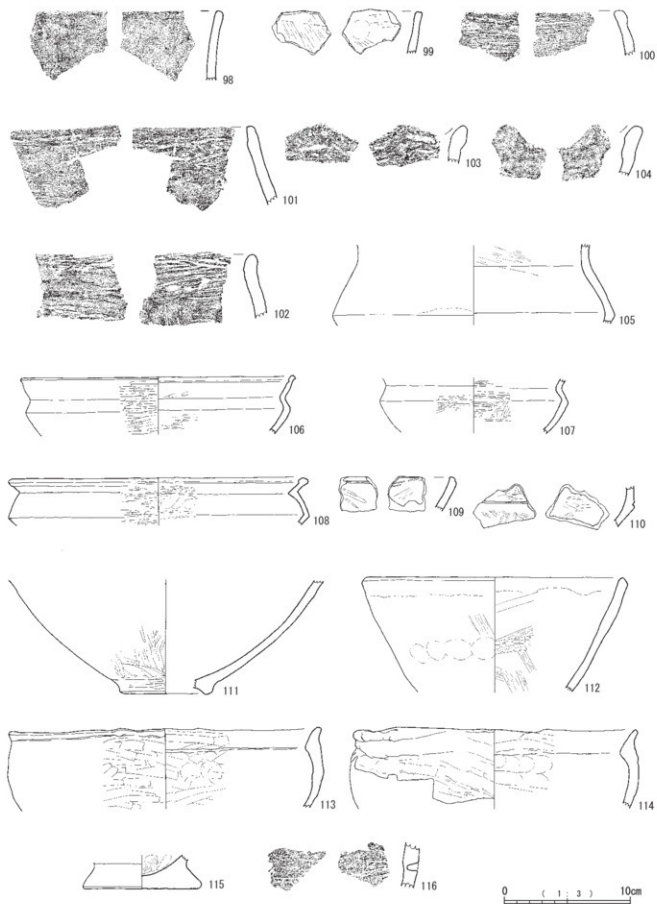


板岩を素材とし、わずかに刃部形成の剥離が確認できる。124は、横長幅広の頁岩フレークを素材としたもので、刃部の調整は若干粗めである。125は、やや斜め方向に剥離された縦長剥片素材を切断し、台形状に形を整え、長側縁に刃部を形成している。126・127は、石斧である。126は、打製石斧で、基部にやや挟りを施し、両側縁からの調整で形を整えている。先端部は欠損している可能性がある。127は、磨製石斧片である。刃部を残してほとんどが失われているため、全体を把握すること

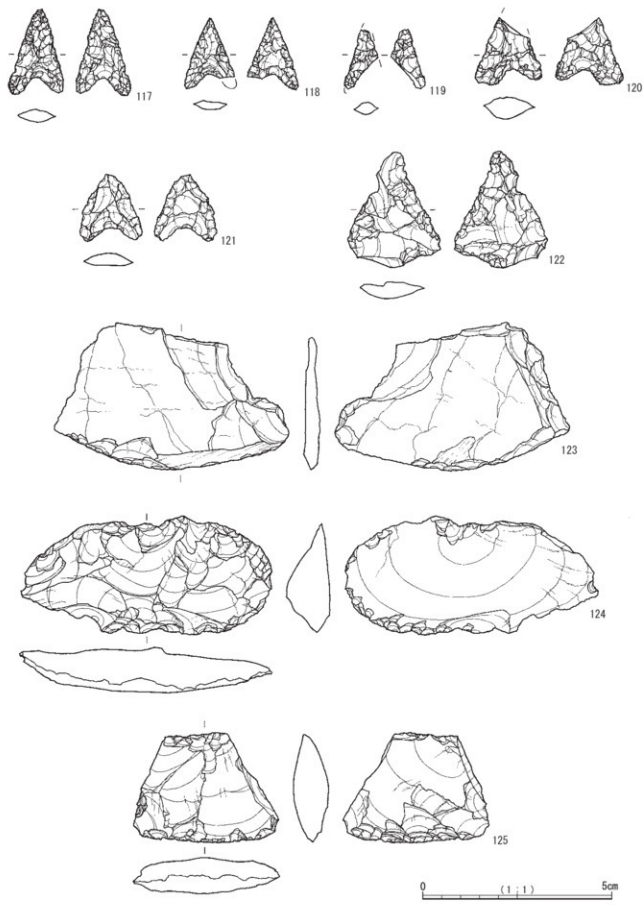
は出来ない。128は、砂岩製の砥石である。129は、上端と下端に敲打痕が見られる。砂岩製の小形のハンマーと捉えている。130～135は、磨石・敲石である。130は、丁度手のひらサイズで、両面にしっかりと磨り面が形成されている。131は、小形のまんじゅう形で磨り面は1面で完全に平坦となる。132は、131よりやや大きめで磨り面は1面で、側縁部に敲打痕が見られる。133は、凝灰岩製で磨り面は、ほぼ平坦である。一部に敲打痕が確認できる。134は、扁平な円形を呈すると考えられる



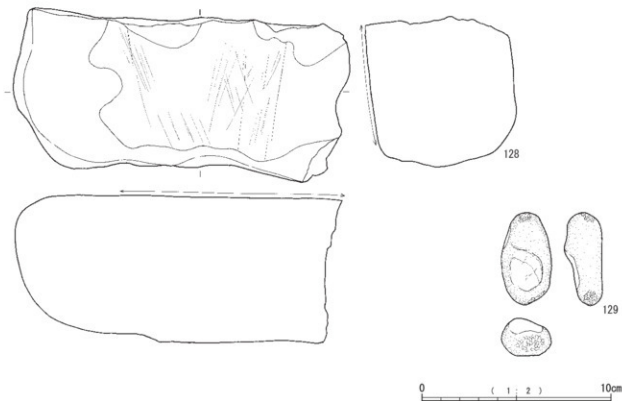
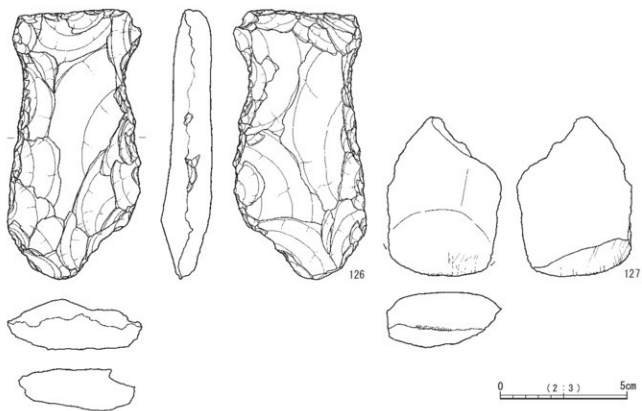
第16図 縄文時代の土器（5）



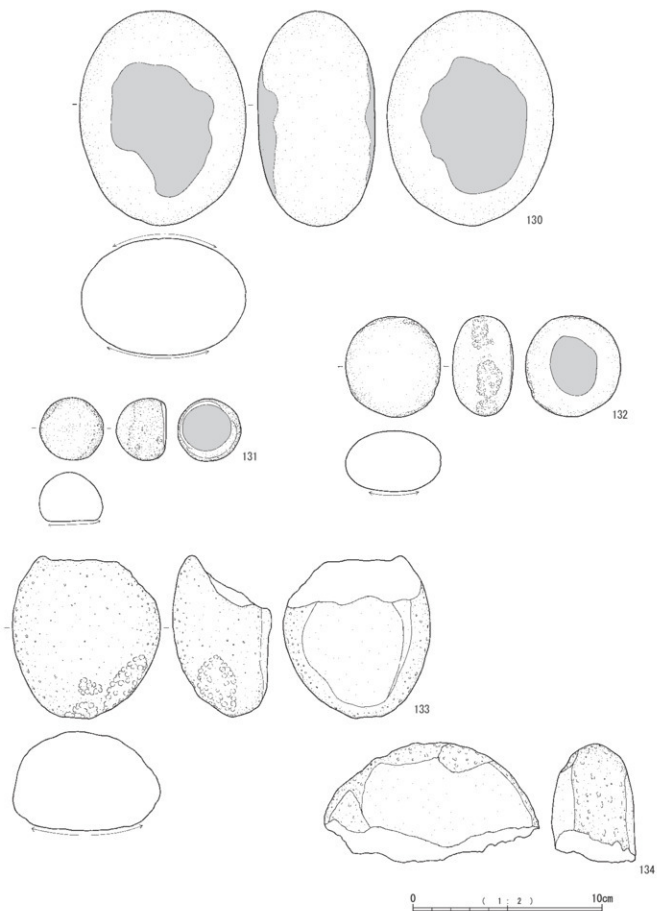
第17図 縄文時代の土器（6）



第18図 縄文時代の石器（1）

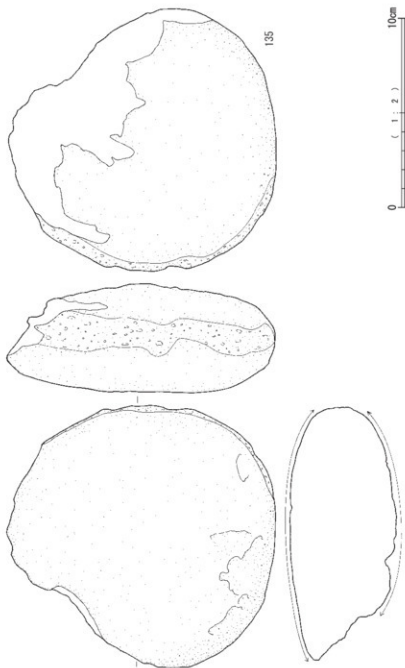


第19図 縄文時代の石器（2）



第20図 縄文時代の石器（3）

が、大きく欠損し全形は解らない。前掲のものと比較して磨り面は、はつきりと形成されていない。135は、扁平で円形をした大型のもので、両面に磨り面が形成される。136は、石皿である。扁平な砂岩製で、使用の際の座りも非常に良いと思われる。磨り面が凹みを持つほど使い込まれている。



第21図 縄文時代の石器(4)

表4 縄文時代の土器観察表(1)

検出(発掘)番号	出土層(層位)	遺構名	器位	器種	器位	調整(内面)	調整(外面)	胎土			色調(内面)	色調(外面)	文様	寸法(mm)		備考				
								灰質	黒質	その他				口径	底径		器高			
15	1195	G-3	Ic	深鉢	口縁部	貝殻委成	工具ナデ	普通	O	O	-	にぶい黄褐色10907/2	にぶい黄褐色10907/4	縄文線、粘土粒	116.0	-	110.1	-		
	1415	G-4	Ic									粘り付け	116.0	-	110.1	-				
	1698	G-2	II									粘り付け	116.0	-	110.1	-				
16	1741	H-4	器4	I類	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	普通	O	O	-	黄灰色2.574/1	にぶい褐色7.5796/4	水産、黒江層、陶器、灰質土質、粘り付、内面、貝殻委成、黒土、粘り付、黒土、粘り付、赤土、漆、漆文	-	-	-	-	
	1502	G-4	Ic	I類	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	良好	O	O	O	-	にぶい黄褐色10962/2	黄褐色10962/2	-	-	-	-	
17	181	H-1-3	-	I類	深鉢	口縁部	工具ナデ	工具ナデ	普通	O	O	-	黒褐色10953/2	黄褐色10952/1	縄文線	-	-	-	-	
	969	G-2	II	I類	深鉢	口縁部	貝殻委成のみ	ナデ	普通	O	O	-	にぶい黄褐色10907/3	黄褐色1095-6	縄文線、粘土粒	-	-	-	-	
	937	G-2	II	I類	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	普通	O	O	-	にぶい黄褐色10953/4	黄褐色10952/1	粘り付	-	-	-	-	
18	181	H-1-3	-	I類	深鉢	胴部	工具ナデ	工具ナデ	良好	O	O	O	-	にぶい黄褐色10953/4	黄褐色10952/1	粘り付	-	-	-	-
19	1863	G-4	II	I類	深鉢	胴部	工具ナデ	工具ナデ	良好	O	O	O	-	褐色7.5794/6	黄褐色1095-8	縄文線、粘土粒	-	-	-	-
21	1344	H-4	II	I類	深鉢	胴部	工具ナデ	ナデ	普通	O	O	O	-	灰黄褐色1095/2	にぶい黄褐色1095/3	粘り付	-	-	-	-
22	181	H-1-3	-	I類	深鉢	胴部	工具ナデ	工具ナデ	普通	O	O	O	-	灰黄褐色1096/2	褐色10964/1	縄文線、粘土粒	-	-	-	-







## 遺物

### 土器 (第23図～第25図)

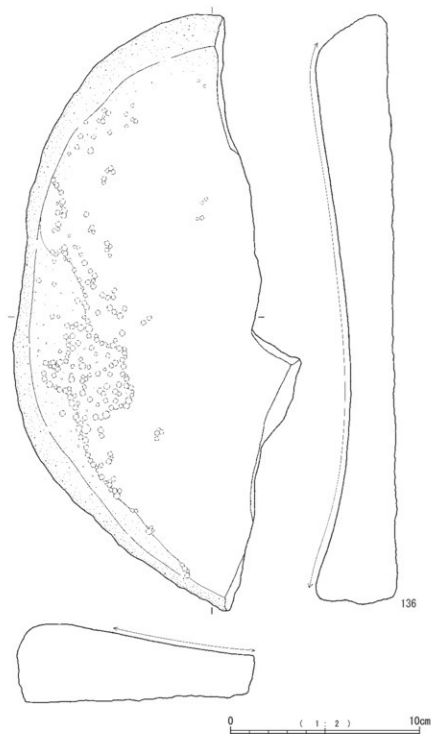
137～140は壺形土器である。137は、口縁部がわずかに外反し直線的に立ち上がり、口唇部は平坦に仕上げられる。肩部は張る形態で、刻みを施す二条の突帯が胴最大径部よりやや上位に廻る。

138は、壺の頸部片と考えられる。屈曲部に断面三角の突帯が廻る。139・140は、壺胴部から肩部の破片と

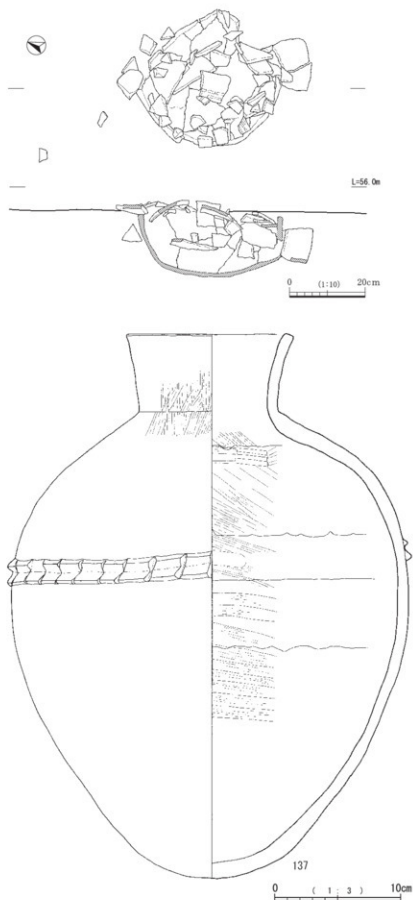
思われる。139は、断面三角形の突帯が三条確認出来る。140は、間隔を開けて細く小さな断面三角形の突帯が五条見られる。いずれも小片のため器形については判然としない。

141～150は、甕形土器である。141～144は、甕の口縁部片である。141は、口唇部が平坦で全体的に厚みを帯びる。歪んだ口縁と考えられる。142は、口唇部が平坦で二条の工具痕、口唇直下のヨコナデが明瞭に残る。口

縁部は外反し、その屈曲部外面に三角突帯が施される。突帯には、刻みを施しているようにも見えるが欠損しているため、突帯つなぎ目か刻みかは判然としない。143は、口縁部断面が先細りとなり、口縁下位に刻みを施した断面三角形の突帯が付く。器面は、ナデ調整で整えられている。144は、口縁部から胴部上位にかけての破片で、口縁部が外反し屈曲部上位外面はカキアゲ調整が施されている。屈曲部は、緩やかで内面に稜線は見られない。145～150は、胴から脚部もしくは脚部片である。145・146は、脚部内面天井部が丸く仕上げられるもので、145は、外面ハケ目調整が顕著に残る。146は、胴部の立ち上がりが緩やかで胴部が張るものと思われる。147は、脚部のみであるが内面天井部は丸く仕上げられているものと考えられる。145と同様に直線的な形状をしており高めの脚となる。148・149は、脚部内面天井部が平坦となるものである。148は、脚部が外弯気味に開く形状で、低めの脚となる。149は、脚部先端を欠損するが148同様の形状と考えられる。150は、胴部のみ破片である。外面に縦方向のハケ目調整が明瞭に残される。151～157は、壺形土器である。151は、口縁部片で外弯気味に開く屈曲部内面の稜線がわずかに確認出来る。152は、頸部から肩部の破片である。なだらかな肩部の下位に断面かまぼこ形の低い二条の突帯が廻る。153・154は、肩部片で153は、大振りの肩部で胴部最大径付近に

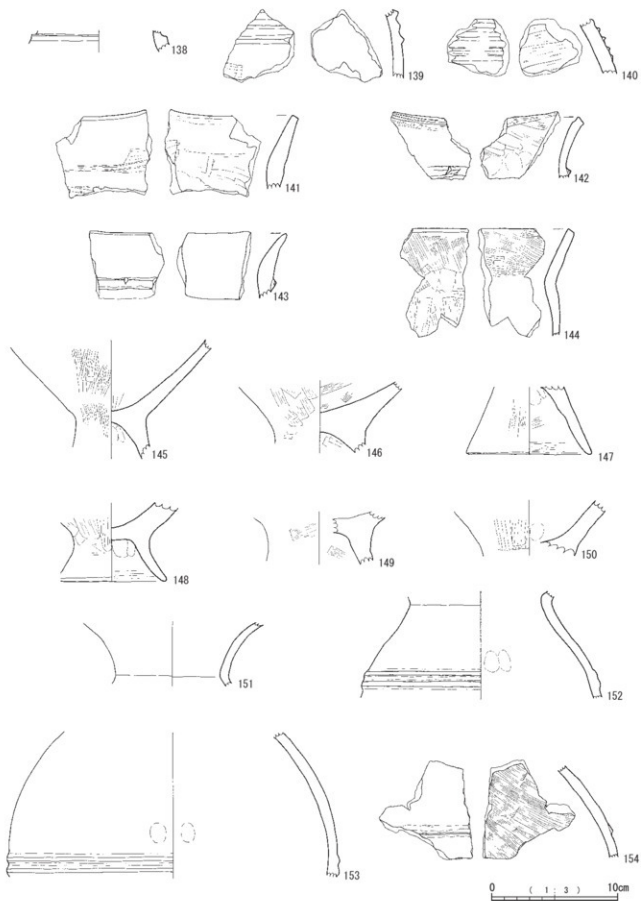


第22図 縄文時代の石器 (5)



152同様の突帯が二条廻る。154は、肩部に鈍い稜線をもつ突帯が廻る。155は、胴部片で、胴部最大径部よりわずかに下位に152同様の突帯が廻る。156・157は、底部付近及び底部片である。156は、丸底を呈するものと考えられる。胎土・焼成も前掲の胴部片などに酷似する。157は、平底気味となるが、若干丸みを帯び座りは良くない。器面は内外面共にミガキ調整を施す。胴部の立ち上がりはやや外開き気味となる。158～161は、高坏の破片である。158は、坏底部付近で脚部は欠損する。坏部内面は平坦に横へ広がり、内外面共に赤色顔料が塗布される。159は、脚部片で、脚端部は欠損する。器形は、坏取り付け部から端部に向かい緩やかにカーブする形状で外面に赤色顔料が塗布されている。160・161は、脚端部の破片である。160は、全体的に薄手に作られて、器形は159同様と思われるが、端部がやや広がりを見せる。161は、器形が緩やかにカーブし開くもので159に酷似する。外面に赤色顔料を塗布している。162は、小形壺の口縁部と思われる。口唇部が先細りとなる。163は、広口の小壺で底部がやや厚いが、全体としては球形状を呈する。164は、蓋と思われる。口縁端部を工具ナデにより平坦に仕上げ、口縁内外面をヨコナデし、わずかに外反させる。165・166は、ミニチュア土器である。165は、甕と思われ、脚と底部の一部が残存する。166は、平底を呈し、小壺を模したものである。

第23図 土器出土状況及び弥生・古墳時代の土器（1）

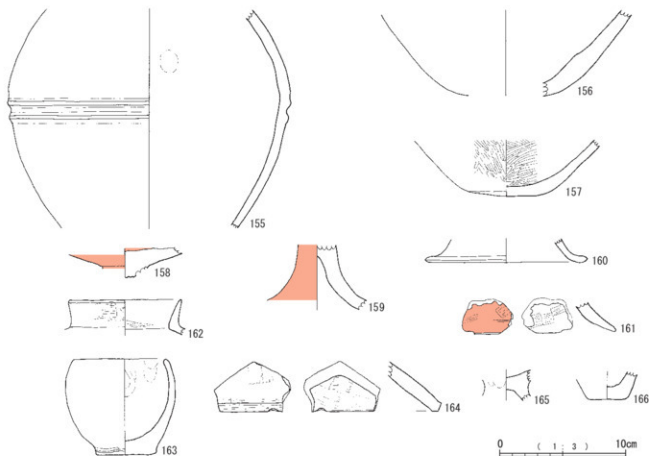


第24図 弥生・古墳時代の土器（2）

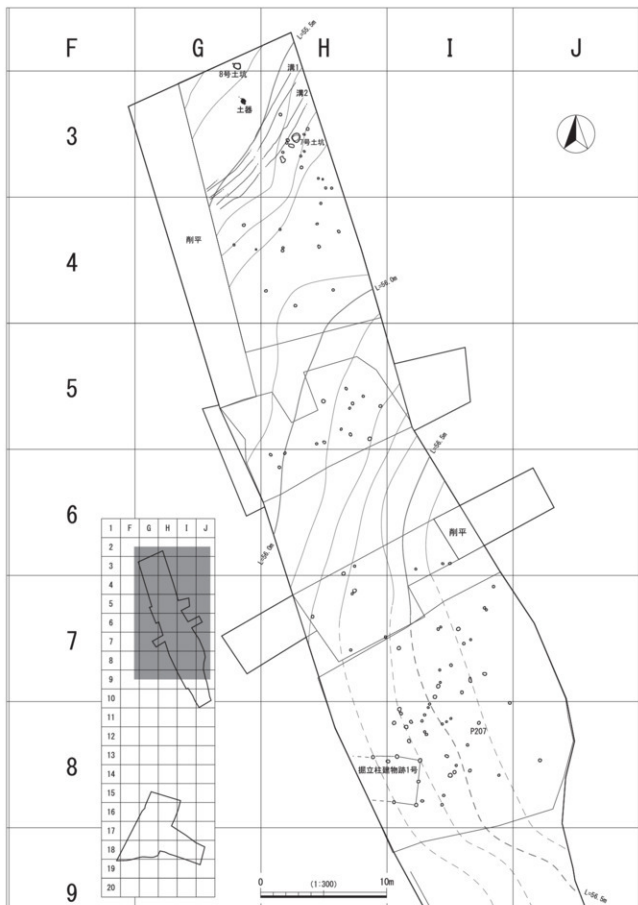


表9 弥生・古墳時代の土器観察表(2)

種別(遺跡番号)	出土層号	遺構名 フリット 全	原位置	種別	器種	部位	調整(内面)	調整(外面)	焼成	胎土		色調(内面)	外面(外面)	文様	透量(mm)			備考																				
										石	土				口徑	底径	器高																					
24	1495	H-3	1c	成川式土器	壺	口縁部	不明	不明	普通	O	O	淡黄色2.517.2	褐色7.5197.6	-	-	-	-	-																				
	151	一層	H-3																-																			
	152	一層	H-3																-																			
	152	一層	H-107	-	中津野式土器	甕	頸部→肩部	ナズ	指線圧痕	ナズ	普通	O	O	-	に広い褐色7.5197.4	褐色5196.6	変形(出射状)2条	-	-	-	-																	
		152	一層	H-172																		-																
		152	一層	H-179																		-																
	154	1917	H-3	器a	中津野式土器	壺	肩部	ハケメ	不明	良好	O	O	-	に広い黄褐色10192.4	褐色7.5197.6	-	-	-	-	-	-																	
		2076	H-3	器b																																		
		155	一層	H-107																		-																
	155	一層	H-179	-	中津野式土器	壺	肩部	ナズ	指線圧痕	ナズ	普通	O	O	-	褐色7.5196.6	赤褐色5195.6	変形2条	-	-	-	-																	
		155	一層	H-179																		-																
		155	一層	H-172																		-																
156	1917	H-3	器a	成川式土器	壺	底部	不明	ナズ	普通	O	O	-	に広い褐色7.5197.4	赤褐色5195.6	-	-	-	-	-	-																		
	2076	H-3	器b																																			
	156	一層	H-107																		-																	
25	157	1	G-17	器a	成川式土器	壺	底部	ミガキ	ミガキ	普通	O	O	-	黄褐色10195.6	に広い褐色7.5196.4	-	-	-	6.2	(4.5)	-																	
	158	1385	G-3	1c																		成川式土器	高坏	底部	ミガキ	文島ナズ	ミガキ	良好	O	O	赤褐色	赤褐色2.5195.6	赤褐色2.5195.6	-	-	-	-	赤色顔料
	159	一層	H-173	-																		成川式土器	高坏	脚部	工具ナズ	ナズ	工具ナズ	ミガキ	O	O	-	に広い褐色2.5194.4	赤褐色5194.6	-	-	-	-	赤色顔料
	160	570	G-4	1	成川式土器	高坏	脚部	工具ナズ	ナズ	工具ナズ	ナズ	良好	O	O	-	赤褐色5195.6	赤褐色5195.6	-	-	(12.2)	(1.9)	-																
		161	一層	G-4-5																			-															
		161	一層	G-4-2																			-															
	162	203	G-3	1	成川式土器	壺	口縁部	ナズ	工具ナズ	ナズ	普通	O	O	-	に広い褐色7.5196.4	褐色7.5194.6	-	-	卓山	(2.8)	-	-																
		162	一層	H-171																			-															
		163	一層	H-171																			-															
	164	1917	H-3	器a	成川式土器	中壺	口縁部	ナズ	指線圧痕	ナズ	普通	O	O	-	に広い黄褐色10196.4	に広い黄褐色10196.4	-	-	-	7.3	4.6	7.7	-															
		164	一層	H-179																				-														
		164	一層	H-3																				器b														
165	2370	H-4	1b	ミコトア土器	壺	底部	工具ナズ	工具ナズ	ナズ	良好	O	O	-	に広い黄褐色10197.2	に広い黄褐色10196.4	-	-	-	-	-	-																	
	165	2370	H-4																			1b																
	165	一層	G-4-2																			-																
166	一層	G-4-2	-	ミコトア土器	不明	調整→底部	ナズ	ナズ	良好	O	O	-	に広い黄褐色10196.2	に広い褐色1.5196.4	-	-	-	2.7	(2.2)	-																		



第25図 弥生・古墳時代の土器(3)



第26図 古代以降の遺構配置図（1）

## 5 古代以降の調査

古代以降、遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑6基、溝2条、ピット98基（掘立柱建物跡含む）が検出された。

### 遺構

#### 掘立柱建物跡

##### 掘立柱建物跡1号（第26図・第28図）

H・I-8区、IV層上面で検出された。規格が2間×2間の建物と想定される。遺構西側は削平されているため、さらに広がる可能性も残る。建物軸は、ほぼ東西南北の方位に沿う。梁行き3.5m、桁行き3.75mの規模をもち、検出面での床面積13.125㎡となる。柱穴は径27cm前後である。Pit 2は検出面下10cm程で径が15cm程度になる二段堀の構造である。

##### 掘立柱建物跡2号（第27図・第29図）

G・H-16・17区、IV層上面で検出された。規格が2間×1間の建物と想定される。遺構北側は80cmの段差を有する一段低い畑になっており、包含層は削平されているため、北方向にさらに建物が広がっていた可能性も考

えられる。建物軸は、1号同様に方位に沿っている。梁行き3.8m、桁行き3.7mの規模をもち床面積14.06㎡となる。Pit 3-4の間隔が3.8mと広がっているが、掘り込みが浅く中間柱が検出できなかった可能性も考えられる。柱穴Pit 6には柱痕跡と思われる埋土状況も確認できる。

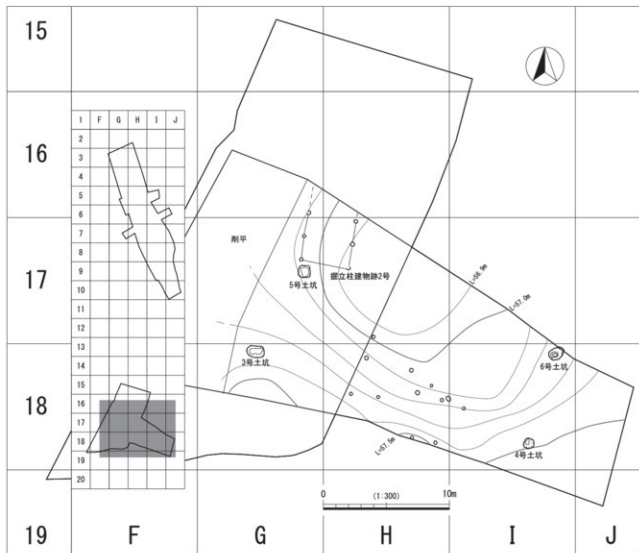
#### 土坑

##### 3号土坑（第27図・第30図）

G-18区、IV層上面で検出された。Ⅲ層土に類似する黒褐色土を主体とする。土坑の形状は、長軸約140cm、短軸約90cmの略楕円形を呈する。検出面からの深さは約35cmである。埋土内遺物は、土師甕口縁部と思われる土器小片が数点出土しているが、図化には及ばなかった。検出面直下での出土で遺構の時期認定に至るものではないと考える。

##### 4号土坑（第27図・第30図）

I-18区、IV層上面で検出された。土坑の形状は、直径約85cmの略円形を呈する。検出面からの深さは約25cm



第27図 古代以降の遺構配置図（2）

で、掘り込み東側壁は緩やかな勾配である。遺構内からの遺物出土はみられず、時期の特定は出来ない。

#### 5号土坑 (第27図・第30図)

G-17区, IV層上面で検出された。土坑の形状は、約95cm四方の略方形を呈する。検出面からの深さは約30cmである。遺構内からの遺物出土はなく、時期の特定は出来ない。

#### 6号土坑 (第27図・第31図)

I-18区, III層上面で検出された。土坑の形状は、長軸約125cm, 短軸約90cmの略楕円形を呈する。検出面からの深さは約35cmである。掘り込み東側壁は緩やかな勾配である。遺構内から遺物が出土したが、無文の銅部片で時期特定には至らなかった。

#### 7号土坑 (第26図・第31図)

H-3区, II層上面で検出された。土坑の形状は、直径約65cmの略円形を呈する。検出面からの深さは約13cmである。皿状の浅い掘り込みである。遺構内から土師器片が出土したが図化には至らなかった。

#### 8号土坑 (第26図・第31図)

G-2区, II層上面で検出された。土坑の形状は、長

軸約55cm, 短軸約45cmの略長方形を呈する。遺構内から遺物は出土しなかった。埋土中に炭化物が多く見られることから火を扱った遺構の可能性が考えられる。

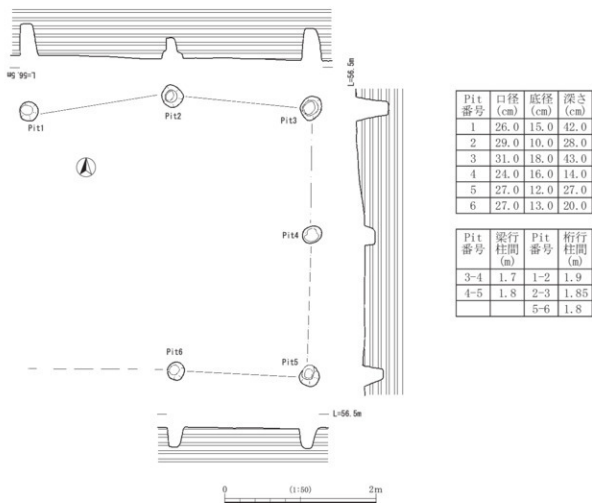
#### 溝1・2 (第26図・第32図)

H-3区からG-4区にかけて、IV層上面で検出した。溝1・2は、ほぼ平行して南南西から北北東の方向へと続く。溝は、一部を除き底部のみの検出にとどまったが、溝1の南側に一部掘り込みが確認でき、検出面での溝上部幅は約85cmで、深さ約10cmである。底部幅は溝1・2ともに50cm～70cm程である。わずかに残った埋土内から7点の遺物が出土した。縄文などの遺物に混じり中世の土師器が出土していることから、溝の時期は中世を想定している。

#### 遺構内遺物 (第32図)

##### 溝2内出土遺物

167は、土師器の坏で底部切り離しは回転糸切りで、表土採集の遺物と接合している。見込みの中央付近に同心円状の工具痕が残される。



第28図 掘立柱建物跡1号検出状況



### ピット内出土遺物

検出された多数のピットの内、数基から遺物が出土したが、いずれも小片で図化には至らず、図化できたピット207の遺物のみ掲載する。取り上げは埋土内一括で行っている。

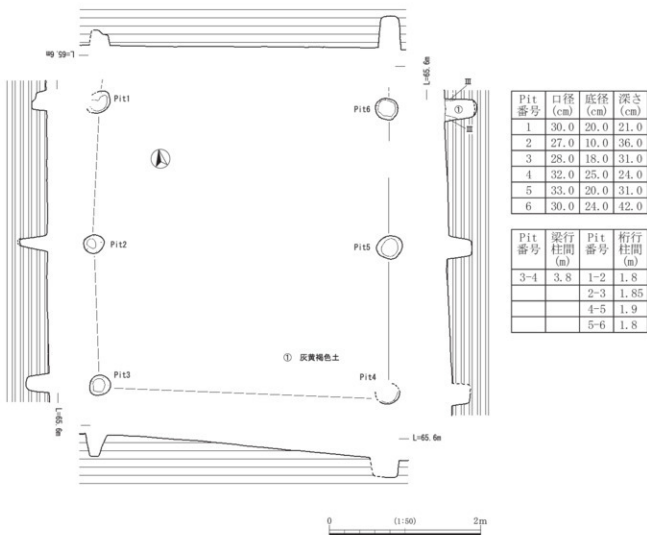
168は、器高の低い土師器杯である。外底面に回転糸切り痕が明瞭に残る。169は、高台から胴部下半が残存する龍泉窯系青磁碗である。高台は、断面四角形で畳付きから高台内面は露胎である。外面は無文、内面には片彫り劃花文を施す。

### 遺物（第33図～第40図）

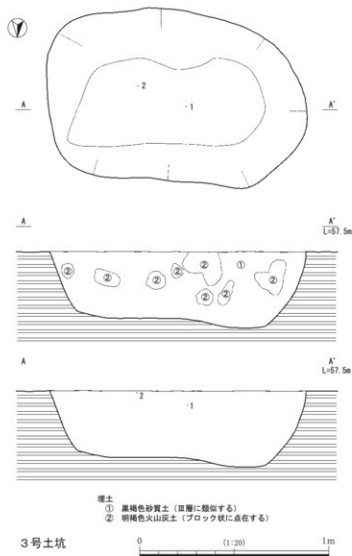
#### 土師器（第35図・第36図）

170～197は土師器で、170～180は土師器碗の破片である。170の口縁は、緩やかな曲線で立ち上がる。171は、体部が直線的に立ち上がる。172は、やや高めの高台が付き、高台内面に輪状の指押さえ痕が残る。173は、体部、脚部ともに欠損するため器形は不明である。174～

179は、内黒土師器碗である。174は、体部外面下半をケズリ調整する。175・176は、高台取り付け部が強く締められ体部に後縁を形成する。177は、ハの字に開く高台で体部は大きく外開きする。178は、高台、口縁部を欠損するため全形は判然としない。179は、高台内面中央にボタン状の凸部が形成される。180は、内赤土師器碗である。高台貼付けは、179と同様の技法で行われている。181～186は、土師器杯である。181は、体部が直線的に外開きする。底部切り離しは回転ヘラ切りと思われる。182・183は、体部でわずかに内湾する器形である。摩擦が激しく底部調整等の確認は出来ない。184・185は、回転糸切り底である。184は、前掲の杯と同様の器形を呈する。185は、口径と底径にあまり差が無く箱形の形態となり、口唇部は鋭く尖る。186は、曲線的な立ち上がりをする口縁部片である。187～194は皿である。187は、体部が曲線的に立ち上がり口唇部が鋭く尖る。188は、体部が微妙に外反する。底部外面に回転糸切り痕が明瞭に残る。189は、焼成が良好で硬質であり、底部



第29図 掘立柱建物跡2号検出状況

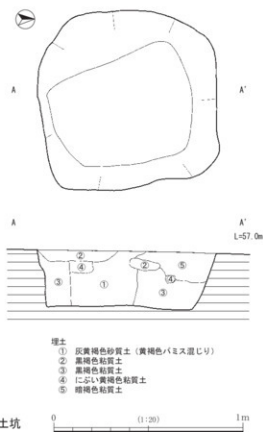
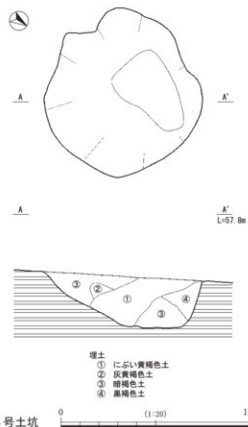


外面の糸切り痕もナゲ消している。190は、体部最下位に沈線が廻るが意図的なものかは判然としない。191・192は、底部が少し浮き上がる。192の底部は、非常に薄い。193は、器形が192に酷似し、底部に回転台からの取り上げ時に付いたと思われる指頭痕が、はっきりと残る。194は、体部外面中位に稜線を有する。

195～197は、土師甕である。195は、口縁部が大きく外反する。内面は斜位のケズリが行われ、口縁部屈曲部で稜線を形成する。胴部外面には縦位の叩き目が残る。196は、口縁部の屈曲が緩やかである。197は、胴部片である。外面には叩き目残り、内面は横位または斜位のケズリ調整が行われる。

#### 青磁 (第37図)

198～219は、青磁である。198～205は、椀の口縁部から体部である。198は、体部内面に二又片刀による文様区画線と飛雲文が施される。口縁端部がわずかに外反する。199は、198と同様と思われるが、区画線は見えない。

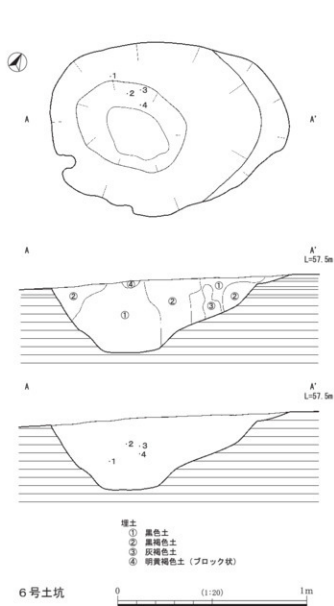


第30図 3～5号土坑検出状況

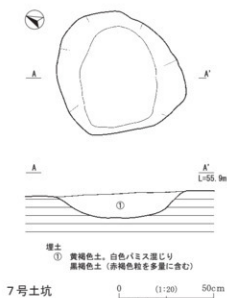
200は、花文が描かれる。口縁部は直口する。201は、器形は200同様で区画線が見えるが文様は見られない。202は、口縁部がわずかに外反し、体部内面には櫛刀による曲線文が描かれる。203は、口縁部が外反し、口縁部内面下位に沈線が一条廻る。体部外面には粗い櫛目文を施し、内面には櫛状工具による文様が描かれる。204は、口縁部がわずかに外反する。体部外面には縦に櫛目を入れ、片影り連弁文が施される。内面には草花文が描かれる。205は、体部片で器形は不明である。外面に細かい縦の櫛目文が施され、内面には篋状工具によるジグザグ文が見える。206・207は、椀の高台から底部で高台断面は四角形で高台内部の割り若干浅い。208～210は、体部外面に片影り連弁文を施す椀で、弁の中心線には稜がある。208は、口縁部が若干外反する。209・210は、内

穹気味に立ち上がる器形である。210は、幅広の連弁文である。211～213は、椀の高台から底部で、211・212は、器形は206に似て、外面に連弁文が施される。212の連弁文は粗い。213は、高台外端部が面取りされ、見込み部外縁に稜を有する。214は、口縁直下に沈線が一条廻り、片影り連弁文の頂部は丸みを帯び、細い連弁を連続させる椀の口縁部片である。

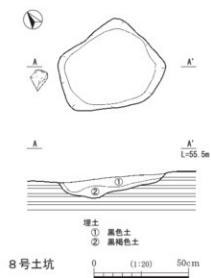
215～217は、坏である。215は、口縁端部が玉縁状に膨らむ。216は、高台端部が断面略三角形で鋭い。非常に発色の良いコバルト色の釉薬が施される。明瞭ではないが体部外面には連弁文が施されているようである。217は、丸みのある体部から口縁端部で横に長く屈折し受け口状となる。外面には頂部が丸みを帯びた連弁文が描かれる。218・219は、皿である。共に底部がわずかに



6号土坑

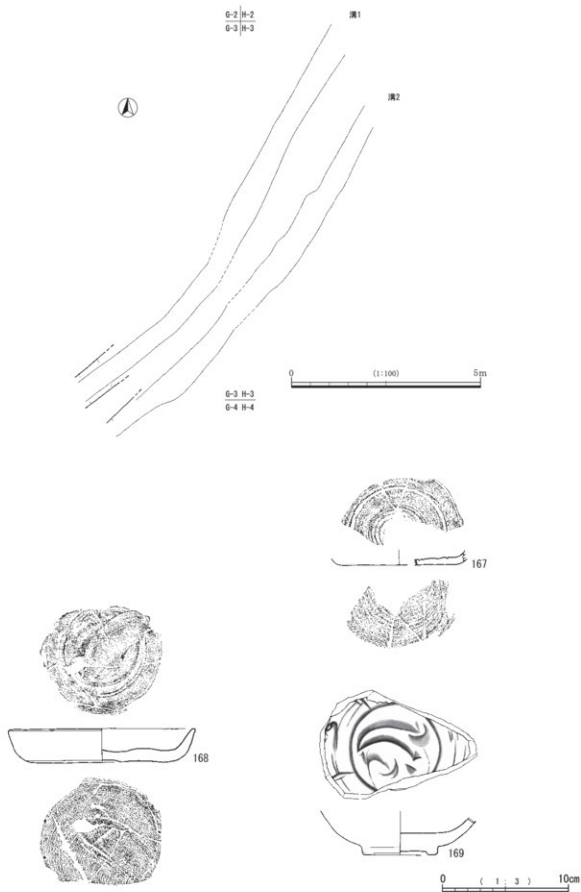


7号土坑



8号土坑

第31図 6～8号土坑検出状況



第32図 溝1・2検出状況，溝2内出土遺物及びピット内出土遺物

表10 溝2内及びピット内出土土器観察表

検出 場所 (発掘 番号)	取上 番号	遺構名 グリッド 座	層位	種類	器種	部位	調整 (内面)	調整 (外面)	焼成	色調 (内面)		色調 (外面)		胎土	流量 (cm)					
										口径	底径	器高	備考							
32	2117	B-3	1-6	土師器	杯	底部	回転ナズ	回転ナズ	普通	透黄褐色 7.5YR6/6		透黄褐色 7.5YR6/6		精練	-	(3.4)	(1.2)	-		
	一筋	M-2	-							-	-	-	-						-	-
	一筋	0-4	-							-	-	-	-						-	-
169	埋土一筋	F1207	-	土師器	杯	口縁部~底部	回転ナズ	回転ナズ	底部ホウリ	良好	透黄褐色 10YR6/3		透黄褐色 10YR6/3		精練	(15.0)	(12.0)	2.7	-	

表11 ピット内出土青磁観察表

検出 場所 (発掘 番号)	取上 番号	遺構名	種類	器種	部位	胎土の色調	釉薬の種類	施釉部位	流量 (cm)			産地	時期	備考
									口径	底径	器高			
32	埋土一筋	F1207	青磁	刷	胴部~底部	褐色色	青磁粉	高台内面の一部を多く全面施釉	-	5.8	(3.5)	龍泉窯	12C 中晩~後半	D 期

浮き上がる。218は、無文である。219は、見込み部にヘラによる曲線文と、ジグザグ状の楕点描文が描かれる。

#### 白磁 (第38図)

220~232は、白磁である。220~225は碗で、220は、やや厚みのある玉縁口縁で、玉縁直下一条稜線を形成する。221は、直行する器形で口唇部に軸刺ぎする口先げ口縁である。222は、内弯気味に立ち上がる口縁で、小片で明瞭ではないが体部外面がうねるような器形になると思われる。223は、高台断面が四角形で、見込みを輪状に軸刺ぎし、残存部体部外面から高台内面まで露胎である。224は、高台断面は223と同様で、高台内面削りが浅い、体部外面下位から高台内面は露胎である。225は、高台断面が三角形を呈し、器壁は全体的に非常に薄い。

226~229は、皿である。底部はいずれも平底である。226は、底面は回転削りにより完全に軸が挿き落とされ

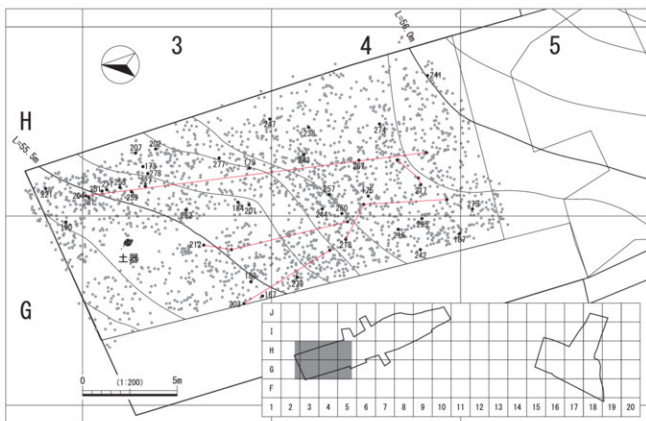
ている。見込み部にヘラ書きの文様が見えるがモチーフは不明である。227は、体部中位で屈曲し、外傾し口縁端部に至る。口唇部は軸刺ぎが行われ口先げ口縁となる。底面の軸削りは痕跡的には伺える程度で全面に軸がかかる。228は、227同様であるが底面の横方向の軸削りが行われている。229は、高台を持つ。

230~232は、四耳壺である。230は、わずかに張る肩部に四条の沈線を施す耳が付く。231は、肩部の立ち上がりが急で、成形時の内面稜線が強く残る。232は底部で、高台端部外面の面取り幅が広く、断面逆台形状となる。体部下位から底部外面には施釉していない。

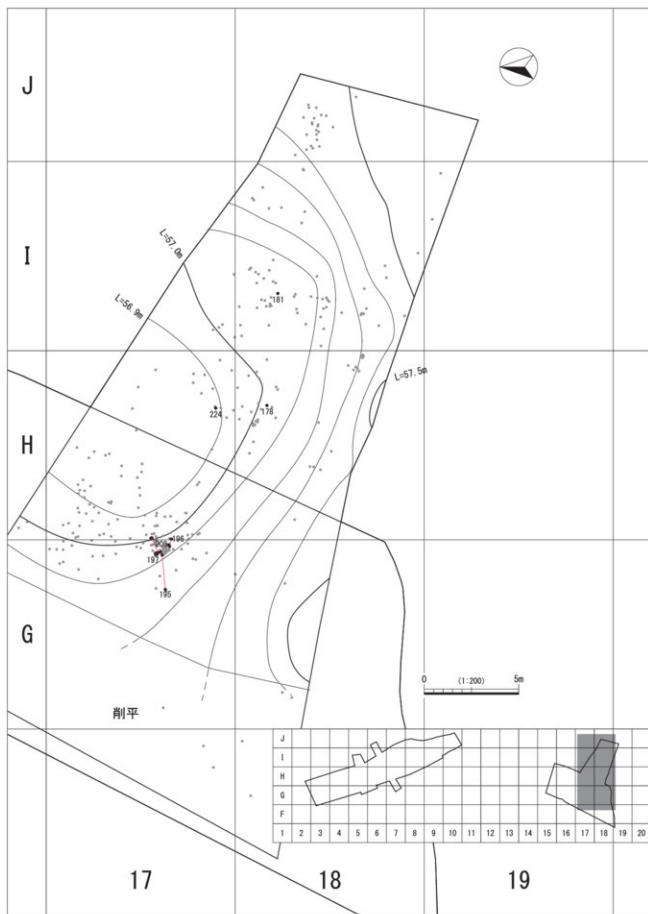
233は、青白磁の合子の蓋である。天井部に草花文が施され、内面外縁部は軸刺ぎされている。

#### 青花 (第38図)

234~237は、青花である。234~236は、端反碗口縁部で、口縁部直下の内外面に横線が、その下位には唐草文



第33図 古代以降の遺物出土状況 (1)



第34図 古代以降の遺物出土状況（2）

が描かれる。237は、皿で口縁部がわずかに内弯気味に立ち上がる。口縁部内外面直下に横線が描かれ、外面には他にも図柄が見えるが、小片のため判断としない。

#### 中国陶器（第38図・第39図）

238～254は、中国陶器である。238～240は、天目碗である。238は褐釉が施され、口縁部が外反する。239・240は、内弯気味に立ち上がる口縁で、239は黒釉が施され、240は褐釉が施される。

241～243は盤で、胎土が粗い。241・242は底部で器壁が非常に薄く、体部の立ち上がりは緩やかである。243は口縁部でわずかにL字状となる。器形は腰部からぐっとすばまり、外面から内面中位付近まで黄釉が薄くかかる。

244～247は、鉢である。244は、口縁端部が平坦で、体部は緩くカーブする。口縁部内面に一条の突起を有し、残存部全体に暗茶褐色釉が薄くかかる。245は、口縁部が玉縁状に肥厚する。光沢のある暗茶褐色釉がかかるが口縁端部とその裏側は釉剥ぎが行われ、口縁端部には目

跡も残る。246・247は、平底の底部で内面には黄釉が薄くかかり、目跡が残る。同一個体の可能性がある。

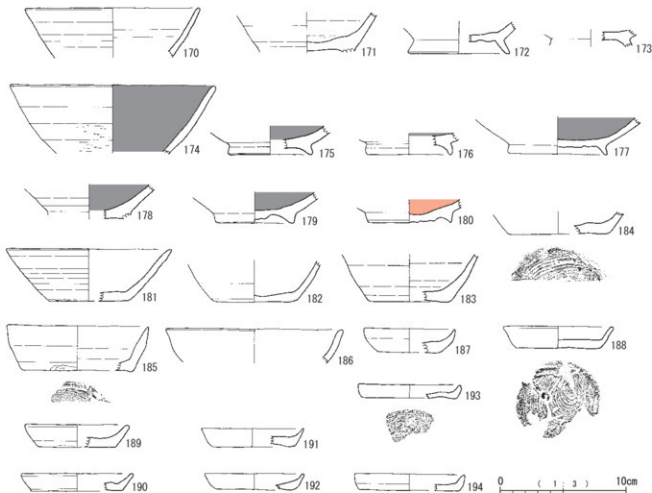
248・249は、水注の口縁と考えられる。248は、口縁部がわずかに外傾する。口縁から外面に黄茶褐色釉がかかる。249は、口縁端部外側へL字に折れる。

250～253は、耳壺である。250～252は、口縁部がくの字に屈曲する。器面には光沢のない褐釉が薄くかかる。252は、口縁部くの字の屈曲が急で鋭い稜を呈する。内外面共に暗茶褐色釉がかかり、口縁部内面のみ釉剥ぎする。253は、肩部片で耳の脱落痕が見える。体部外面には茶褐色釉がかかる。

254は、甕の底部付近で内面に叩き目が残る。外面には薄く黄釉がかかる。

#### 中世須恵器（第39図）

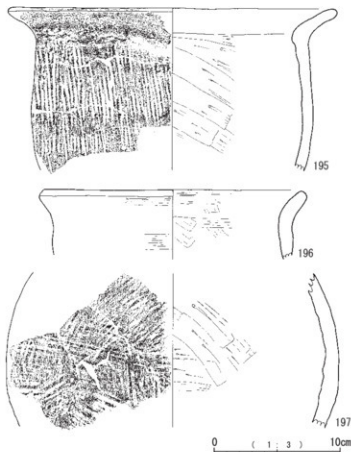
255～267は、中世須恵器である。255・256は、赤色の胎土に、白色粒がわずかに混じる、カムイヤキ壺の頭部及び肩部である。256は、かなり肩の張る器形を呈すると思われる。



第35図 包含層出土遺物 土師器

表12 土師器・土師甕観察表

調査 番号	出土 層位	遺物名 フリット	部位	種別	群	部位	調整(内面)	調整(外面)	焼成	胎土 石 灰 質	色調(内面)	外面(内面)	胎土	調整 高さ	時期	備考				
170	一層	H-11 E	-	土師器	鉢	口縁部-体部	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	濃黄褐色 1098/4	濃黄褐色 1098/4	練焼	(14.0)	(16.9)	加前中~加後中	-		
171	一層	H-10	-	土師器	鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	濃黄褐色 1098/3	濃黄褐色 1098/3	練焼	(7.4)	(8.1)	加前中~加後中	-		
172	一層	G-17	中	土師器	鉢	体部	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	にない黄褐色 1098/1	にない黄褐色 1098/1	練焼	(8.0)	(2.6)	加前中~加後中	-		
173	194	H-3	I C	土師器	鉢	底面	不明	不明	良好	-	-	にない黄褐色 1987/3	にない黄褐色 1987/3	練焼	-	-	加前中~加後中	内底		
174	一層	H-17 F	-	内底土師器	鉢	口縁部-胴部	ミガキ	ヨコナデ	良好	-	-	黒色 81/5	灰白色 1098/1	練焼	(16.2)	(5.5)	加前中~加後中	内底		
175	1219	H-4	I C	内底土師器	鉢	胴部-底面	ミガキ	ヨコナデ	良好	-	-	黒色 81/5	にない黄褐色 1987/3	練焼	(8.6)	(2.3)	加前中~加後中	内底		
176	一層	H-13 B	-	内底土師器	鉢	底面	ミガキ	ヨコナデ	良好	-	-	黒色 81/5	灰白色 1098/1	練焼	(7.0)	(3.1)	加前中~加後中	内底		
177	一層	H-17 E	-	内底土師器	鉢	胴部-底面	ミガキ	ヨコナデ	良好	-	-	黒色 81/5	にない黄褐色 1987/2	練焼	(7.0)	(3.1)	加前中~加後中	内底		
178	一層	H-10	底	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
179	一層	H-17 J	-	内底土師器	鉢	胴部-底面	ミガキ	ヨコナデ	良好	-	-	黒色 81/5	褐色色 1098/1	練焼	(5.4)	(6.0)	加前中~加後中	内底		
180	一層	H-3	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
181	283	H-3	I	内底土師器	鉢	胴部-底面	ミガキ	ヨコナデ	良好	-	-	黒色 81/5	濃黄褐色 1098/3	練焼	(6.0)	(2.5)	加前中~加後中	内底		
182	180	一層	H-10 F	-	内底土師器	鉢	胴部-底面	ミガキ	ヨコナデ	良好	-	-	にない黄褐色 1097/2	にない黄褐色 1097/2	練焼	(8.4)	(3.0)	加前中~加後中	内底	
183	181	203	I-10	中	土師器	鉢	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	-	-	明黄褐色 1097/5	明黄褐色 1097/5	練焼	(13.0)	(8.2)	加前中~加後中	-	
184	182	一層	H-17 F	-	土師器	鉢	底面	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	-	-	濃黄褐色 1098/3	濃黄褐色 1098/3	練焼	(6.0)	(3.4)	加前中~加後中	-	
185	183	一層	H-17 E	-	土師器	鉢	胴部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	濃黄褐色 1098/3	濃黄褐色 1098/3	練焼	(6.2)	(3.1)	加前中~加後中	-	
186	184	371	H-3	I	土師器	鉢	胴部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	-	-	にない黄褐色 1096/2	にない黄褐色 1096/2	練焼	(8.0)	(1.7)	-	-	
187	185	一層	H-4	-	土師器	鉢	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	-	-	褐色 598/6	褐色 598/6	練焼	(11.3)	(8.2)	加前中~加後中	-	
188	186	一層	H-17 F	-	土師器	鉢	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	-	-	にない黄褐色 1098/1	にない黄褐色 1098/1	練焼	(14.2)	(2.7)	-	-	
189	187	2480	G-4	I C	土師器	皿	口縁部-底面	不明	底面を凸り	良好	-	-	濃黄褐色 598/6	濃黄褐色 598/6	練焼	(7.2)	(4.0)	加前中	-	
190	188	2026	G-3	I C	土師器	皿	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	にない黄褐色 1096/4	にない黄褐色 1096/4	練焼	(8.6)	(6.1)	加前中	-	
191	189	一層	H-10 F	-	土師器	皿	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	-	-	濃黄褐色 1096/2	濃黄褐色 1096/2	練焼	(5.2)	(3.1)	加前中	-	
192	190	1184	G-2	I C	土師器	皿	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	にない黄褐色 1097/1	にない黄褐色 1097/1	練焼	(8.0)	(7.4)	加前中	-	
193	191	一層	H-9	-	土師器	皿	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	濃黄褐色 1098/3	濃黄褐色 1098/3	練焼	(8.2)	(6.1)	加前中	-	
194	192	一層	H-10 F	-	土師器	皿	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	にない黄褐色 1987/3	にない黄褐色 1987/3	練焼	(8.0)	(7.1)	加前中	-	
195	193	一層	H-17 E	-	土師器	皿	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	にない黄褐色 1987/4	にない黄褐色 1987/4	練焼	(8.0)	(8.3)	加前中	-	
196	194	一層	H-17 E	-	土師器	皿	口縁部-底面	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	-	-	にない黄褐色 1987/4	にない黄褐色 1987/4	練焼	(8.0)	(8.3)	加前中	-	
197	195	7	G-17	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
198	95	G-17	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
199	96	G-17	中	土師器	壺	口縁部-胴部	ケズリ	ヨコナデ	ハクメ	ヨコナデ	普通	○	○	にない黄褐色 1098/3	黒褐色 1098/2	-	(25.8)	(12.9)	-	-
200	13	G-17	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
201	25	H-17	中	土師器	壺	口縁部	ケズリ	ナデ	ナデ	良好	○	○	にない黄褐色 1098/3	明赤褐色 598/6	-	(20.6)	(3.5)	-	-	
202	6	G-17	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
203	7	G-17	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
204	53	G-17	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
205	67	H-17	中	土師器	壺	胴部	ケズリ	格子タタキ	普通	○	○	灰黄褐色 1098/2	赤褐色 598/6	-	-	-	-	-	-	
206	68	H-17	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
207	85	G-17	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
208	94	G-17	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	



第36図 包含層出土遺物 土師甕

257・258は、東播系の捏ね鉢の口縁部で、端部は黒色を呈する。257は、口縁端部がわずかに、くの字に曲がる。258は、玉縁状の口縁である。

259・260は、壺である。259は、産地不明で、口縁部の弯曲が大きく口縁端部が斜め下方を向く。260は、樺万丈産と考えられる底部で、内面と底部外面に細かいハケ目状の調整痕が残る。底部厚に比べ体部厚がかなり厚い。261~263は、胴部で産地は不明である。261~263は、同一個体の可能性がある。粗い平行叩き目が外面に残り、内面はナデ調整が行われる。264は、摩滅が激しく、外面にわずかに叩き目が残る。265は、外面に細かい斜格子の叩き目が残る。内面は丁寧なナデ調整が施される。

266・267は、備前の摺鉢である。266は、1単位7条の摺り目が確認でき、使用頻度が高かったのか、摺り目が摩滅している。267は、1単位9条の摺り目で、体部内面の摺り目が明瞭に残っている。

#### 国産陶磁器(第39図)

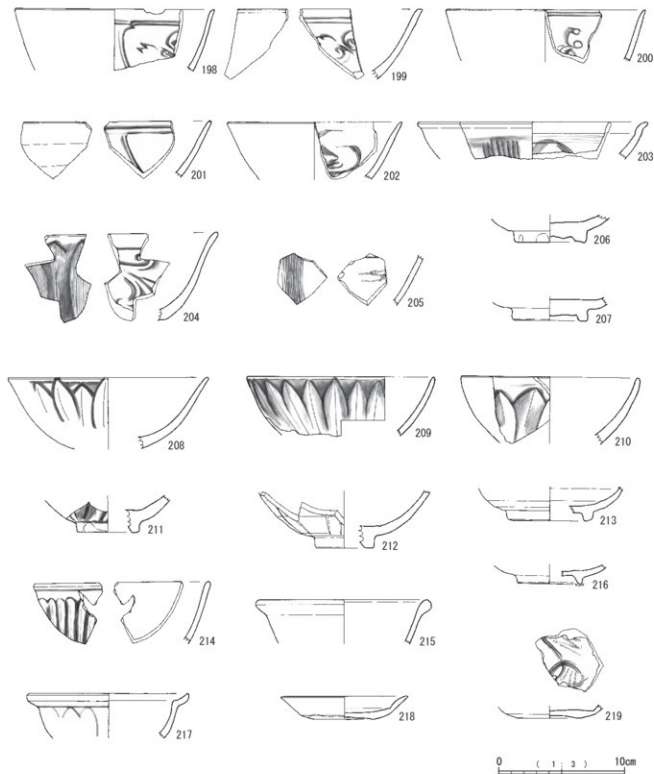
268~273は、陶器である。268は、唐津陶器で、内面に黄灰色釉がかかり、砂目が残る。269・270は、肥前系で、白色の胎土に透明釉がかかる染付である。269は、筒型碗の底部から体部で、体部外面に雪持笹文が描かれる。270は、見込み蛇の目軸割ぎを行う碗で、269同様に外面に雪持笹文が描かれる。271



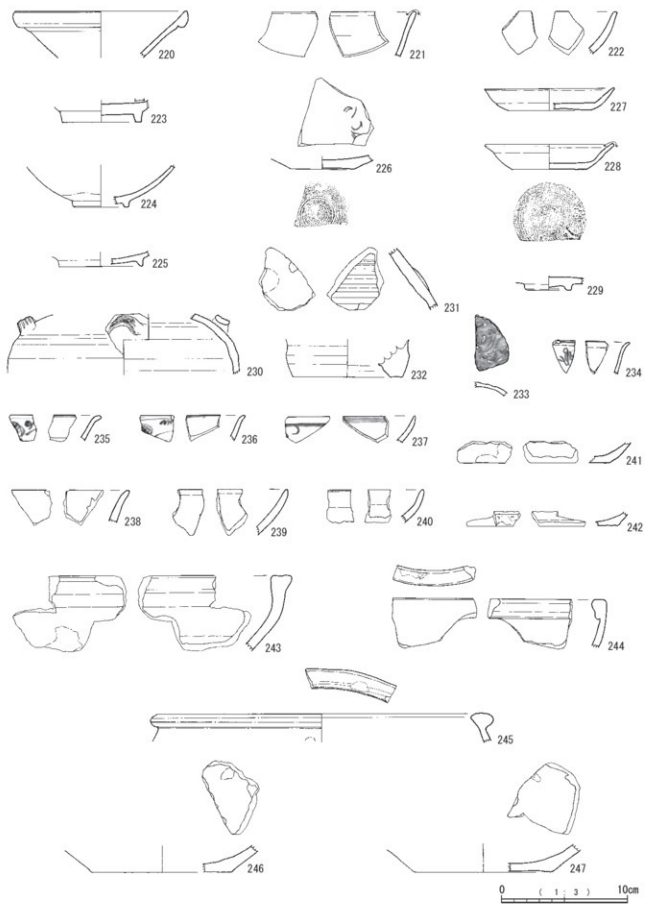
は、苗代川産の摺鉢で、全面に暗茶褐色釉が薄くかかる。摺目が鋭くほとんど使用されていないと思われる。272は、苗代川産の土瓶で光沢のある褐色釉が施される。胴部外面下半は露胎である。273は、肥前系の片口鉢の口縁部でやや内傾する玉縁状の口縁である。

#### その他の遺物（第40図）

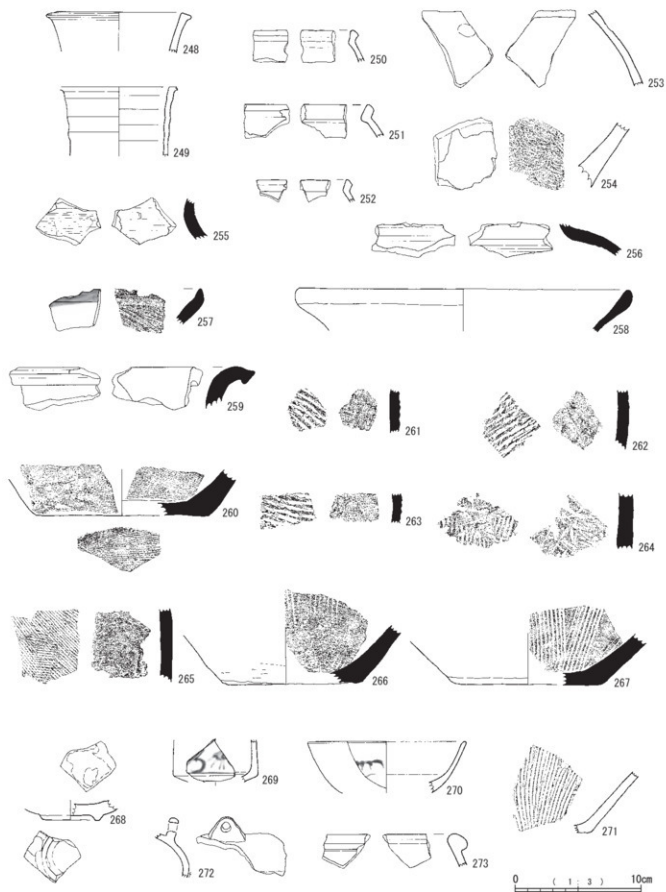
274・275は、円盤形土製品である。276は、輪羽口の先端部で外面は溶融しガラス質化している。277～280は、滑石製品である。277・278は、石銅銅部片と思われる。277は、内面の一部に再加工の痕跡が見られる。278は、加工痕が見受けられず、人為的に破断したものか、自然



第37図 包含層出土遺物 青磁

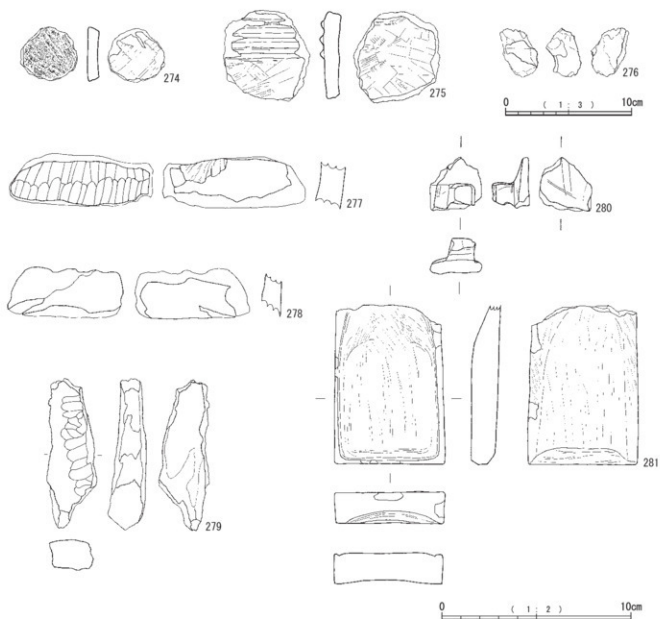


第38图 包含层出土遗物 白磁·青花·中国陶器



第39图 包含层出土遗物 中国陶器·中世须惠器·国产陶磁器

に破砕したものか判然としなない。279は、石鍋底部から胴部にかけての破片と思われる。内面に横方向の再加工痕が見られるが、加工目的は不明である。280は、石鍋の取っ手部分と思われる。破断しているが、取っ手部分には穿孔が施される。蓋の可能性も考えられる。281は、石甕である。甕面を見ると、縁が低く、陸が盛り上がる形状となり陸周囲に溝が切られている。落潮まで残存するが、墨池は欠損し失われている。残存する甕側部はわずかに外傾気味に立ち上がる。甕陸と甕側後部は弧状に凹む。これが本来の形状か、二次的に加工されたものかは不明である。



第40図 包含層出土遺物 その他の遺物

表13 陶磁器観察表(1)

国産品 品目 品番	製造 番号	通称名 ブランド名	形状	種類	部位	胎土の色目	釉薬の種類	施釉部位	法量 (mm)			産地	時期	備考	
									口径	底径	器高				
198	一底	H-3	-	青磁	胴	口縁部~体部	黄灰色	青磁釉	残存部全面施釉	(15.80)	-	(4.90)	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
199	一底	0-2	-	青磁	胴	口縁部~体部	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
200	一底	H-4	-	青磁	胴	口縁部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	(16.00)	-	(4.30)	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
201	1575	H-3	Ⅱ	青磁	胴	口縁部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
202	796	H-2	I a	青磁	胴	口縁部	緑灰色	青磁釉	残存部全面施釉	(14.00)	-	(4.60)	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
203	1067	0-4	I a	青磁	胴	口縁部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	(18.20)	-	(3.00)	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
	2107	0-3	I a	青磁	胴	口縁部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
	764	H-3	I a	青磁	胴	口縁部~体部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
204	2169	H-4	I a	青磁	胴	口縁部~体部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
	一底	H-4-5	-	青磁	胴	口縁部~体部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
205	一底	H-4-5	-	青磁	胴	体部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	同安窯系	12C中頃~後半	-
206	一底	H-2-3	-	青磁	胴	高台~底部	灰黄色	青磁釉	裏付~高台内面施釉	-	(5.80)	(2.20)	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
207	785	H-3	I a	青磁	胴	高台~底部	灰白色	青磁釉	裏付~高台内面施釉	-	(6.00)	(1.90)	龍泉窯系	12C中頃~後半	-
	62	0-17	Ⅱ	青磁	胴	口縁部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	(16.00)	-	-	龍泉窯系	13C初頃~前半	-
208	一底	0-H-17	-	青磁	胴	口縁部~体部	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	(16.00)	-	-	龍泉窯系	13C初頃~前半	-
	一底	1-17 Ⅱ	-	青磁	胴	口縁部~体部	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	(16.00)	-	-	龍泉窯系	13C初頃~前半	-
	一底	1-17 Ⅱ	-	青磁	胴	口縁部~体部	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	(16.00)	-	-	龍泉窯系	13C初頃~前半	-
	一底	1-17 Ⅱ	-	青磁	胴	口縁部~体部	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	(16.00)	-	-	龍泉窯系	13C初頃~前半	-
	一底	H-17 Ⅱ	-	青磁	胴	口縁部~体部	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	(16.00)	-	-	龍泉窯系	13C初頃~前半	-
210	一底	H-1-5-6	-	青磁	胴	口縁部~体部	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	(13.50)	-	(5.30)	龍泉窯系	13C初頃~前半	-
211	772	H-2	I a	青磁	胴	高台~底部	灰白色	青磁釉	裏付~高台内面施釉	-	(4.80)	(2.00)	龍泉窯系	13C初頃~前半	-
	671	0-2	I	青磁	胴	高台~底部	灰褐色	青磁釉	裏付~高台内面施釉	-	(4.60)	(4.60)	-	-	-
212	710	0-3	I	青磁	胴	高台~底部	灰褐色	青磁釉	裏付~高台内面施釉	-	(4.60)	(4.60)	-	-	-
	1045	0-4	I a	青磁	胴	高台~底部	灰褐色	青磁釉	裏付~高台内面施釉	-	(7.00)	-	龍泉窯系	14C初頃~後半	-
213	一底	0-H-2~4	-	青磁	胴	口縁部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	14C初頃後~16C前・中頃	-
214	一底	H-1-7-8	-	青磁	胴	口縁部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	14C初頃後~16C前・中頃	-
	一底	H-1-7-8	-	青磁	胴	口縁部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	14C初頃後~16C前・中頃	-
215	一底	0-H-2~4	-	青磁	胴	口縁部	黄灰色	青磁釉	残存部全面施釉	(13.40)	-	(3.60)	龍泉窯系	12C中頃~14C初頃	-
216	1025	0-4	I a	青磁	胴	底部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉、裏付のみ施釉	-	(5.00)	-	龍泉窯系	12C中頃~14C初頃	-
	2220	H-4	I a	青磁	胴	口縁部~胴部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	(13.00)	-	(3.50)	龍泉窯系	14C初頃~14C中頃	-
217	2221	H-4	I a	青磁	胴	口縁部~胴部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	(13.00)	-	(3.50)	龍泉窯系	14C初頃~14C中頃	-
	2566	H-4	I a	青磁	胴	口縁部~胴部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	(13.00)	-	(3.50)	龍泉窯系	14C初頃~14C中頃	-
	584	0-4	I	青磁	胴	口縁部~底部	灰白色	青磁釉	裏部外周下半部施釉	(10.20)	(4.80)	(1.80)	同安窯系	12C中頃~後半	-
218	1211	H-4	I a	青磁	皿	口縁部~底部	灰白色	青磁釉	裏部外周下半部施釉	(10.20)	(4.80)	(1.80)	同安窯系	12C中頃~後半	-
	2180	H-4	Ⅱ	青磁	皿	口縁部~底部	灰白色	青磁釉	裏部外周下半部施釉	(10.20)	(4.80)	(1.80)	同安窯系	12C中頃~後半	-
219	一底	1-J-0-9	-	青磁	皿	底部	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉、底部のみ施釉	-	(5.00)	(1.10)	同安窯系	12C中頃~後半	-
220	一底	1-J-0-9	-	白磁	胴	口縁部	灰白色	透明釉	残存部全部施釉	(13.60)	-	(3.70)	-	11C後半~12C前半	-
221	1141	H-2	I a	白磁	胴	口縁部	灰白色	透明釉	残存部全部施釉	-	-	-	13C中頃~14C初頃前後	口壳	-
222	一底	0-F-2-4	-	白磁	胴	口縁部	灰白色	透明釉	残存部全部施釉	-	-	-	-	-	-
223	一底	1-J-0-9	-	白磁	胴	高台	灰白色	透明釉	残存部外周施釉、内面及び底部を輪状に施釉	-	(6.40)	(1.80)	-	12C中頃~後半	-
	174	H-17	Ⅱ	白磁	胴	体部~高台	灰白色	透明釉	裏部~高台内面施釉	-	(4.40)	(3.40)	-	13C中頃~14C初頃前後	-
224	一底	0-H-2~4	-	白磁	胴	体部~高台	灰白色	透明釉	裏部~高台内面施釉	-	(4.40)	(3.40)	-	13C中頃~14C初頃前後	-
225	一底	-	-	白磁	胴	底部~高台	灰白色	透明釉	裏付部のみ施釉	-	(6.60)	(1.20)	-	14C後半	-
226	一底	0-H-2~4	-	白磁	皿	底部	灰白色	透明釉	残存部全部施釉、底部のみ施釉	-	(5.00)	(1.60)	-	12C中頃~後半	-
227	802	H-2	I a	白磁	皿	口縁部~底部	灰白色	透明釉	全面施釉、口唇部内面ののみ施釉	(10.40)	(6.60)	(1.70)	-	12C中頃~後半	-
	一底	1-17 Ⅱ	-	白磁	皿	口縁部~底部	灰白色	透明釉	全面施釉、口唇部内面ののみ施釉	(10.40)	(6.60)	(1.70)	-	12C中頃~後半	-
	一底	1-17 Ⅱ	-	白磁	皿	口縁部~底部	灰白色	透明釉	全面施釉、口唇部内面ののみ施釉	(10.20)	(6.00)	(2.00)	-	12C中頃~後半	-
229	一底	0-H-2~4	-	白磁	皿	底部~高台	灰白色	透明釉	内面施釉	-	(3.80)	(1.10)	-	14C~15C	-
230	一底	0-H-2~4	-	白磁	耳蓋	裏部	灰白色	透明釉	残存部全部施釉	-	-	-	11C後半~12C後半	-	-
231	一底	F~H-0-3	-	白磁	耳蓋	裏部	灰白色	透明釉	残存部全部施釉	-	-	-	12C後半~14C前半	-	-
232	一底	H-1-7-8	-	白磁	耳蓋	底部	灰白色	透明釉	裏部~底部外周施釉	-	(8.80)	(3.10)	-	12C後半~14C前半	-

表14 陶磁器観察表(2)

検出 番号	出土 番号	遺構名 グランド名	層位	種別	器種	部位	胎土の色調	釉薬の種類	施釉部位	測量 (cm)			産地	時期	備考	
										口径	底径	器高				
233	一統	I-J-0-9	-	青白磁	香子	蓋	灰白色	青白磁釉	扉受け部輪状に施釉す	-	-	-	-	-	-	
234	一統	J-6	-	染付	鉢	口縁部	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	肥前	18C代	-	
235	一統	I-0-9	-	青花	鉢	口縁部	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	14C後半～15C前半	-	-	
236	一統	I-J-0-9	-	青花	鉢	口縁部	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	14C後半～15C中頃	-	-	
237	一統	I-J-0-9	-	青花	皿	口縁部	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	15C末～16C前半・中頃	-	-	
238	412	H-4	I	中国陶器	天目碗	口縁部	灰白色	黒焼釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	-	-	
239	一統	H-4-5	-	中国陶器	天目碗	口縁部	黄灰色	黒焼	残存部全面施釉	-	-	-	-	-	-	
240	一統	H-17	-	中国陶器	天目碗	口縁部	黄灰色	焼釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	-	-	
241	2139	H-4	II	中国陶器	釜	体部～底部	黄灰色	黄釉	底部無施釉。内面及び体部の一部に施釉	-	-	-	11C後半～12C前半	-	-	
30	2536	G-4	I c	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	242	一統	H-4	-	中国陶器	釜	底部	褐色色	黄釉	残存部内面のみ施釉	-	-	-	11C後半～12C前半	-	
		一統	G-H-2～4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	243	1249	H-4	I c	-	中国陶器	釜	口縁部	褐色色	黄釉	内面以下以外施釉	-	-	-	11C後半～12C前半	-
		一統	F～H-2～4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	244	405	H-4	I	中国陶器	鉢	口縁部	灰黄褐色	緑茶焼釉	残存部全面施釉	-	-	-	-	-	-
245	一統	F-H-2～4	-	中国陶器	鉢	口縁部	黄灰色	緑茶焼釉	口縁部1/3位の上下面 各輪状に施す	(24.00)	-	(2.30)	-	-	口縁に目録	
246	一統	G-H-2～4	-	中国陶器	鉢	胴部～底部	明赤褐色	黄釉	-	-	(11.20)	(2.20)	-	13C	-	
247	1590	H-2	II	中国陶器	鉢	底部	明赤褐色	黄釉	-	-	(11.00)	(2.20)	-	13C	目録が異なる	
248	一統	H-4	-	中国陶器	水注	口縁部～胴部	にぶい褐色	黄釉	口縁部途中から外面に かけて施釉	(10.00)	-	(2.20)	-	11C後半～12C代	-	
30	249	一統	H-17 c	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		一統	I-17-1	-	中国陶器	水注	口縁部～胴部	灰黄色	灰色釉	残存部全面施釉。口縁部 のみ施釉す	内径 (8.0)	-	(5.50)	-	-	-
		一統	I-17-2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	250	一統	F～H-2～4	-	中国陶器	耳壺	口縁部	褐色	透黄釉	残存部全面施釉	-	-	-	13C	-	
251	771	H-2	I c	中国陶器	耳壺	口縁部	褐色	透黄釉	残存部全面施釉	-	-	-	13C	-		
252	一統	I-J-0-9	-	中国陶器	耳壺	口縁部	赤褐色	緑茶焼釉	口縁部内面輪状に施す	-	-	-	13C	-		
30	815	H-2	I c	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	253	一統	G-H-2～4	-	中国陶器	耳壺	胴部	内面側ににぶい 赤褐色。外面 は黄灰色	緑茶焼釉	残存部全面施釉	-	-	-	13C	-	
254	一統	I-7-0	-	中国陶器	壺	胴部	灰色	透黄釉	残存部外面のみ施釉	-	-	-	-	-	-	

表15 中世須恵器観察表

検出 番号	出土 番号	遺構名 グランド名	層位	種別	器種	部位	調整 (内面)		色調 (内面)		胎土の色調		測量 (cm)			産地	時期	備考
							調整 (内面)	調整 (内面)	色調 (内面)	外面 (内面)	胎土の色調	口径	底径	器高				
255	一統	-	-	カムイヤキ	壺	胴部	-	-	褐色色 3C/	灰色 3A/	灰赤色	-	-	-	-	13C	-	
256	一統	J-6	-	カムイヤキ	壺	胴部	-	-	褐色色 3C/	灰色 3A/	にぶい赤褐色	-	-	-	-	13C	-	
257	1745	H-4	II	須恵器	こね鉢	口縁部	-	-	灰白色 5Y7/1	灰白色 5Y7/1	灰色	-	-	-	美濃系	12C～14C代	-	
30	258	一統	H-17	-	須恵器	こね鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	-	(26.40)	(3.30)	美濃系	-	-	
	259	806	H-3	I c	須恵器	壺	口縁部	-	ナデ	褐色色 10YR6/1	灰色 7.5Y4/1	-	-	-	-	-	-	
260	574	H-4	I	須恵器	壺	胴部～底部	-	-	-	-	灰色	-	(13.60)	(3.70)	糠乃丈	13C代	-	
30	261	一統	F-H-2-3	-	須恵器	甕or壺	胴部	ナデ	タタキ	-	-	灰色	-	-	-	-	-	
	262	361	H-3	I	須恵器	甕or壺	胴部	ナデ	タタキ	-	-	灰色	-	-	-	-	-	
	263	一統	H-4	-	須恵器	甕or壺	胴部	ナデ	タタキ	-	-	灰色	-	-	-	-	-	
	264	一統	I-0-9	-	須恵器	甕or壺	胴部	ナデ	タタキ	-	-	灰色	-	-	-	-	-	
	265	2258	G-4	I c	須恵器	甕or壺	胴部	ナデ	格子タタキ	-	-	灰黄褐色	-	-	-	-	-	
266	一統	H-10	-	須恵器	ナリ鉢	胴部～底部	-	-	-	-	黄灰色	-	(12.20)	(4.60)	備前	15C～16C	-	
267	1014	H-4	I c	須恵器	ナリ鉢	底部	ナデ	ナデ、タタキ焼	灰色 8E/	灰色 5Y4/1	-	-	(12.00)	(4.10)	備前	15C～16C	-	

表16 近世陶磁器観察表

発掘 番号	出土 層位	遺物名 グリッド表	種類	器種	部位	胎土の色調	釉薬の種類	施釉部位	質量 (mm)			産地	時期	備考
									口径	底径	器高			
268	一階	G-H-3-4	陶器	壺	底部	-	-	残存部内面施釉	-	(4.4)	(1.6)	濃津	16C末～17C初	-
269	一階	-	染付	茶碗鉢	腹部	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	肥前	18C後半	-
270	一階	I-J-6-9	染付	碗	口縁部～底部	灰白色	透明釉	残存部全面施釉、内面底部下半輪割ぎ	(12.8)	-	(4.1)	-	近世	-
271	一階	G-H-2～4	陶器	すり鉢	胴部～底部	明赤褐色	鉄釉	外底面釉拭き取り	-	-	-	鎌倉後代川	19C代	-
272	一階	H-I-7-8	陶器	土瓶	腹部	にぶい赤褐色	鉄釉	胴部外面下半以外施釉	-	-	-	鎌倉後代川	18C後半	-
273	一階	H-I-7-8	陶器	片口鉢	口縁部	灰黄色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-	肥前	-	-

表17 その他の遺物観察表

発掘 番号	出土 層位	遺物名 グリッド表	層位	種類	器種	部位	調整 (内面)	調整 (外面)	構成	色調 (内面)		色調 (外面)		石目計測値				備考
										最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)					
274	2589	H-4	Ⅱ a	土製品	円筒状土製品	胴部	工具ナデ	ハケメ	良好	オリーブ黃色 SY2.1	にぶい黄褐色 10YR5/4	-	-	-	-	(直径 4.3cm)		
275	2513	H-5	I c	土製品	円筒状土製品	胴部	ハケのちナデ	工具ナデ、ナデ	良好	にぶい黄褐色 10YR5/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	-	-	-	-	(直径 7.0cm)		
276	一階	I-8-9	-	土製品	甕形口	先輪部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
277	1376	H-3	I c	滑石製品	石鏡	胴部	-	-	-	-	-	(7.6)	(2.7)	(1.3)	54.0	-		
278	1439	H-3	Ⅱ	滑石製品	二次加工品	-	-	-	-	-	-	(8.2)	(2.6)	(1.2)	28.0	-		
279	1505	G-4	Ⅱ	滑石製品	二次加工品	-	-	-	-	-	-	(8.0)	(2.7)	(1.6)	49.0	-		
280	一階	G-H-2～4	-	滑石製品	石鏡	軸手	-	-	-	-	-	(2.7)	(2.7)	(1.9)	13.0	-		
281	1396	H-3	Ⅱ	石製品	石鏡	-	-	-	-	-	-	(8.5)	5.9	1.7	159.0	-		



昭和50年当時の高付遺跡周辺地形  
「国土画像情報 (カラー空中写真)」国土地理院

## 第4章 自然科学分析

### 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教

廣田正史・山形秀樹・小林絃一

Zaur Lomtadze・竹原弘展

#### 1. はじめに

南九州市川辺町野崎に位置する高付遺跡より出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料No.2（PLD-29924）は、アカホヤ火山灰上面で検出された1号土坑の黒色埋土である。周辺からは、古墳時代の土器が出土している。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>13</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

#### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年代正に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、図1に暦年代正結果をそれぞれ示す。暦年代正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年代正曲線が

更新された際にこの年代値を用いて暦年代正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年代正の詳細は以下のとおりである。

暦年代正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年代正にはOxCal4.2（校正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1 $\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 $\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代正曲線を示す。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-29924	試料No.2 遺構：土坑1号 層位：埋土中 備考：アカホヤ火山灰上面で検出、掘り込み内に黒色土が充填。周辺より古墳時代の土器が出土	種類：土壌（ヒューミンを抽出） 状態：dry	湿式篩分：106 $\mu\text{m}$ 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表2 放射性炭素年代測定および暦年代正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年代正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-29924 試料No.2	-21.04 $\pm$ 0.26	3407 $\pm$ 21	3405 $\pm$ 20	1743-1709 cal BC (45.7%) 1701-1683 cal BC (22.5%)	1751-1641 cal BC (95.4%)



#### 4. 考察

以下、 $^{14}\text{C}$ 年代および $2\sigma$ 暦年代範囲(確率95.4%)を基に結果を整理する。

1号土坑の黒色埋土である試料No.2 (PLD-29924)は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $3405 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が1751-1641 cal BC (95.4%)であった。これは、前迫(2008)、小林(2008)、工藤(2012)を参照すると、縄文時代後期中葉にあたる。当土坑周辺からは、古墳時代の土器が出土しており、土坑埋土は再堆積である可能性が考えられる。

#### 参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.  
小林謙一(2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社。  
工藤雄一郎(2012) 後氷期の考古編年と14C年代. 旧石器・縄文時代の環境文化史, 212-229, 新泉社。

前迫亮一(2008) 市来式土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 674-681, アム・プロモーション。

中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haidlas, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

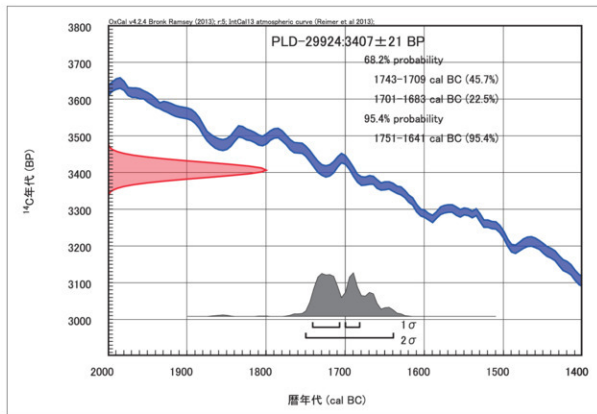


図1 暦年校正結果

## はじめに

南九州市川辺町に所在する高付遺跡は、薩摩半島南部の広大な面積を占めるシラス台地に形成された開析谷壁直下に位置する。谷は薩摩半島中部に分布する四万十層群により構成された山地より流下する万之瀬川により開析されており、調査区は標高約50mの万之瀬川左岸の微高地にある。発掘調査では、黒褐色および赤褐色を呈する砂質の火山灰土層から、縄文時代後期から古墳時代および中近世までの遺物が出土している。

本報告では、火山灰土層に含まれる火山砕屑物を抽出し、その鉱物組成や砕屑物の特徴などを捉えることによって、テフラであることを確認し、その特性を把握する。それらの特性から含有されるテフラを同定し、遺物包含層に関わる年代資料を作成する。

## 1. 試料

試料は、調査区内の土層断面より採取された2点の土壌である。調査区内の土層は、発掘調査所見により、上位よりI層からV層まで分層されている。I層は、表土のI a層、白色バミスの多い旧耕作土のI b層、白色バミスの少ない旧耕作土のI c層に細分され、I b層とI c層には擾乱遺物が多く出土している。II層は赤褐色の砂質土、III層は黒褐色の砂質土とされ、II層からは縄文時代後期～中近世の遺物が出土し、III層からは縄文時代後期～古墳時代の遺物が出土している。なお、II層の赤褐色の色調は、土地改良後の水田による影響とされており、本来はIII層の上部に相当すると考えられている。IV層は明褐色火山灰土とされ、V層はにぶい黄褐色の砂質土とされている。IV層とV層からは遺物は出土していない。試料は、これらIV層とV層から各1点ずつ採取したものである。発掘調査所見では、V層は、砂質であることや白色軽石の混在する状況などから、谷壁を構成するシラスの砕屑物の流れ込みにより形成されたと考えられている。

分析時の観察では、IV層は径数mm程度の橙色の軽石が

含まれるしまりのない火山灰土であり、V層は最大径約20mmの白色軽石や最大径約6mmの橙色軽石などが散在する。

## 2. 分析方法

試料は、水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。

水洗後に乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4mm/1/8mmの砂分を、ボリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方、重液分離により得られた軽鉱物分については、火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の3つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉱物分から抽出した火山ガラスと重鉱物分から抽出した斜方輝石を対象とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMA10Tを使用した温度変化法を用いる。

## 3. 結果

## (1) テフラ組成分析

分析結果を表1、図1に示す。以下に各試料の重鉱物組成および火山ガラス比を述べる。

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
IV層 火山灰	0	116	54	0	0	1	74	5	250	146	6	72	26	250
V層中 火山灰	0	149	31	6	0	0	58	6	250	77	1	117	55	250

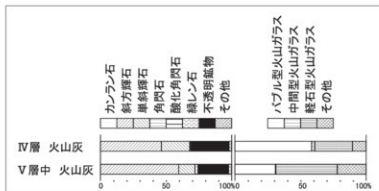


図1 重鉱物組成および火山ガラス比

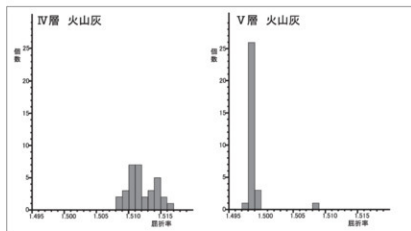


図2 火山ガラス屈折率

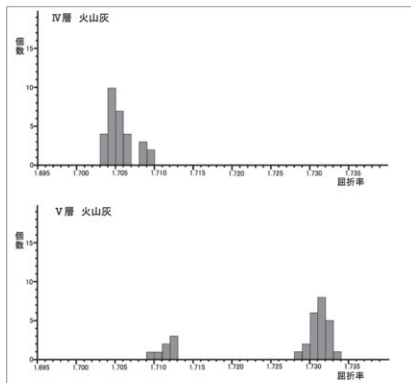


図3 斜方輝石の屈折率

#### ・IV層

重鉱物組成は、斜方輝石が最も多く、45%程度を占め、次いで不透明鉱物が30%ほど、単斜輝石が約20%を占める。火山ガラス比では、バブル型火山ガラスが多く、60%近くを占め、次いで軽石型火山ガラスが30%程度含まれる。

#### ・V層

重鉱物組成は、斜方輝石が多く、約60%を占め、次いで不透明鉱物が25%程度、単斜輝石が10%ほど含まれ、微量の角閃石も含まれる。火山ガラス比では、軽石型火山ガラスが最も多く、45%程度を占め、バブル型火山ガラスを30%程度伴う。

#### (2) 屈折率測定 (図2・図3)

##### 1) 火山ガラス (図2)

IV層の火山ガラスの測定された屈折率の値はn1.497からn1.544までの非常に広い範囲におよぶが、主要なレンジはn1.509-n1.517であり、そのレンジのなかでのモードはn1.511-1.512である。

V層の火山ガラスの屈折率のレンジはn1.498-1.500であり、n1.499に高い集中度を示す。ただし、極めて微量のn1.508-1.510を示す高屈折率の火山ガラスも混在する。

##### 2) 斜方輝石 (図3)

IV層の斜方輝石の屈折率は、 $\gamma$ 1.704-1.707という低屈折率のレンジと $\gamma$ 1.708-1.711という高屈折率のレンジとに分かれる。低屈折率のモードは $\gamma$ 1.705であり、高屈折率のモードは $\gamma$ 1.709である。

V層の斜方輝石の屈折率は、 $\gamma$ 1.706-1.714という低いレンジと $\gamma$ 1.727-1.734という高いレンジに明瞭に別れる。量的には高いレンジの方が多い。

#### 4. 考察

IV層の火山灰土の母材となったテフラは、テフラ組成分析結果により、バブル型火山ガラスを主体とする火山ガラス質テフラであると判断される。重鉱物組成が両輝石を主体とすることと火山ガラスの主要な屈折率とから、この火山ガラス質テフラは、九州南方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤテフラ (K-Ah: 町田・新井, 1978) に同定される。K-Ahの噴出年代は、町田・新井 (1978) 以来、放射性炭素年代である6300年前という年代で知られていた。最近では、第四紀学および考古学において放射性炭素年代をそのまま使用するのではなく、それを「換算」した暦年代が使用されることが多い。また、湖底堆積物における年縞によるK-Ahの年代も推定されている (福沢, 1995)。これらのことから、K-Ahの噴出年代については暦年代である7300年前という年代が表示されるようになってきている (例えば町田・新井 (2003) など)。前述したようにIV層の上位のIII層からは縄文時代後期以降の遺物が出土しており、IV層をK-Ah

とすることと矛盾しない。

なお、IV層の火山ガラスおよび斜方輝石には、K-Ahの屈折率のレンジから外れるものが含まれているが、これらはK-Ah以外のテフラに由来する可能性がある。例えば、n1.500前後の低い屈折率の火山ガラスは台地を構成するシラスに由来するものと考えられ、 $\gamma$ 1.705前後の低い屈折率の斜方輝石は、桜島を給源とするテフラに由来する可能性がある。

V層の分析で捉えられた火山ガラスは、その特異な屈折率の結果から、ほとんどがシラス由来のものであると考えられる。微量に混在する火山ガラスは桜島を給源とするテフラのものであろう。また、斜方輝石においても高屈折率の斜方輝石はシラスに由来するものであり、低屈折率の斜方輝石は桜島のテフラに由来するものと考えられ、火山ガラスの屈折率の状況とも整合する。また、V層の試料観察時に認められた軽石については、軽石自体は粘土化していたためにその特性は調べることはできなかった。今回の分析では、屈折率の状況から細砂径の火山ガラスのほとんどと斜方輝石の多くがシラス由来であることが確認された。したがって、シラスに由来する砕屑物の流れ込みとする発掘調査所見はほぼ支持されると考えてよい。

今回の分析により、IV層の形成年代は、K-Ahの噴出年代に相当することから、周辺地域における同様の火山灰土層は、良好な年代指標層になると言える。

#### 引用文献

- 福沢仁之, 1995, 天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物。第四紀研究, 34, 135-149.  
古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別。地質学雑誌, 101, 123-133.  
町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, 143-163.  
町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.

図版 1 重鉱物火山ガラス



1.IV層 火山灰 重鉱物



2.V層中 火山灰 重鉱物



3.IV層 火山灰 火山ガラス



4.V層中 火山灰 火山ガラス

Op:斜方輝石, Cpx:単斜輝石, Ho:角閃石, Op:不透明鉱物, Vg:火山ガラス,

Qz:石英, Pl:斜長石.

0.5mm

## 第5章 総括

高付遺跡では、Ⅱ層・Ⅲ層において、縄文時代中期から近世に至る遺物が出土しているが、各層を時期的に分離できるような遺物出土状況を示していない。おそらく遺跡南側の山裾を源流とする小河川が、遺跡中央部を分断するように流下していることが安定した遺物包含層、各期に形成された生活面を残存させることを阻害していた可能性が考えられる。また、近年の土地改良工事により大きく土地改変が行われていることも、遺構・遺物の保存状況を悪化させている要因である。

### 縄文時代

#### 遺構

用途不明の土坑が、2基検出された。1号土坑は、Ⅳ層上面で検出された。遺物小片しか出土していないため、遺物からの時代検討は出来ないが、埋土内から炭化物が出土しており、科学分析の結果、縄文時代後期中葉の値を示した。

2号土坑は、1号土坑同様Ⅳ層上面で検出された。遺構内から多少バリエーションに富むがⅢ類土器がまとまって出土していること、他時期の遺物が土師器小片2点にとどまっていることから2号土坑も1号土坑同様に縄文時代後期の所産と捉えておきたい。

#### 遺物

Ⅰ類土器は、外反もしくは外傾する器形に主文様として突帯文を付し、直線のモチーフで縦位や斜位の沈線を施す。また、内面に貝殻連点文が施される特徴から深浦式土器と判断した。

Ⅱ類土器は、小片しか出土しなかったため器形は不明であるが、口縁下位に縦位の刻み目、その下位に見られる棒状工具による横位沈線が施されることから、岩崎上層式土器と判断した。

Ⅲ類土器は、口縁部が外反、直口、わずかに内弯するものなど多様であるが、高付遺跡では全体器形を把握できる資料は出土しなかった。文様は、平行する二条沈線を主体として直線文・曲線文・入組文など多様であるが、出土資料が小片のため文様モチーフ全体が把握できる資料はわずかであった。上記のような特徴から指宿式土器と判断した。当遺跡の縄文時代遺物の主体を占めている。

Ⅳ類土器は、小片のみの出土であるが、口縁下部のくの字に屈曲する部分の上下に貝殻腹縁による斜位の連続刺突が施される特徴から丸尾式土器と判断した。

Ⅴ類土器は、沈線間に縄文を残す磨消縄文の手法がみられる土器片で、1点のみの出土である。北久根山式土器と思われる唯一の資料であるが、他地域との交流を示す資料として、注意しておく必要がある。

Ⅵ類土器は、粗いナデ調整や条痕を残す粗製の深鉢形土器と、胴部上位が張り、そろばん玉状の器形を呈し、丁寧なミガキ調整が施される浅鉢形土器がみられる。黒川式土器と判断されるものである。この中に粗製の浅鉢で、土器製作の仕上げ段階で作業を放棄したと思われる資料が出土している。口縁部の途中からナデ調整が行われず、粘土紐の輪積みがそのまま残されており、土器製作過程を明瞭に観察できる良好な資料となった。

### 弥生・古墳時代

#### 遺構

当該期と特定できる遺構は確認出来なかった。

#### 遺物

資料数があまり多くない状況での考察になることを前提として、甕の特徴は、口縁部屈曲部内面の稜線がほとんど認識できず、屈曲部から口縁部までがあまり長くない。壺は、胴部が張り頭部が縮まった上で、わずかに外傾し直線的に立ち上がる口縁と、外弯し大きく外開きする口縁が見られる。これらの特徴から、本遺跡当該期の主体は、中津野式土器の時期であると思われる。

しかし、中津野式土器段階で安定的に認められる、大型の高坏が見受けられない。同じ南九州市知覧町の鍛冶園遺跡でも同様の傾向がみられた。この傾向が地域の特徴と言えるかはまだ確定できないが、今後の類例の増加に期待を残したい。

出土した高坏をみると、脚台端部に向かい曲線的に開く、辻堂原・笹貫式段階のもので、甕・壺とは時期的に異なる。調査エリアから外れた部分に上記段階の生活痕跡が残されている可能性を示唆しているものと考えられる。

なお、出土状況を鑑みるに、中津野式段階の遺物も、当時の原位置を留めているとは考えがたく、調査区外に当時の生活域が存在する可能性が大きい。

### 古代以降

#### 遺構

掘立柱建物跡2棟、溝状遺構2条、ピット98基（掘立柱建物跡含む）を検出し、所属時期が判別できなかった土坑6基も古代以降のものとして報告を行った。

検出された2棟の掘立柱建物跡は、東西南北を意識した軸取りを行っている。本遺跡から約300m程北側に位置し、平成19年度南九州市教育委員会により調査された馬場田遺跡でも本遺跡同様、東西南北を意識した掘立柱建物跡が検出されている。馬場田遺跡例は、柱穴の規模も大きく、構造もしっかりとしたもので、1棟は北側と

東側2面に底の付く構造となっている。さらに建物を取り囲む可能性のある大溝を伴っている。この大溝も規格性が高く、東西南北を意識し構築されている。

また、遺構に伴って出土している古瀬戸、青磁、青白磁に加えて中国産の褐釉甕や壺などの唐物、威信財的な陶磁器が多数出土していることから、居住者の特定には至らないものの、13cから14c頃を中心とした、当時の地域の有力者の居館跡であろうと想定されている。

本遺跡では掘立柱建物跡に伴う遺物は出土していないが、包含層出土遺物として古代の土師器が少量出土し、青磁、白磁、中国陶磁器等の出土傾向から11c末頃から12cを中心とした一群と、15c以降の一群が比較的多くまとって出土していることが伺える。13cから14cの遺物も出土しているが、総合的に見ると若干少ない印象を受ける。

本遺跡の掘立柱建物跡は、建物規模や遺物の出土傾向の相違から、馬場田遺跡で検出された居館跡とは、やや異なった趣きを呈する。時期的な違いも考えられ、建物自体の性格の違いも考えられるが、どちらも確証を得る材料に欠けているため、今回のまとめで結論づけることは保留する。

しかしながら、出土する遺物は馬場田遺跡同様、有力者のみ所持できるような、輸入陶磁器類が多く、馬場田遺跡前後の当地域を考察する上で良好な資料を提示することとなった。

次に本遺跡のG・H-3区で検出された平行する2条の溝状遺構は、遺構内出土遺物から承切り底の土師器皿が出土しているが、残存状況が悪く時期の特定には至らなかった。溝状遺構は東西南北を意識して構築されていないため、馬場田遺跡で見られた屋敷を囲む区画溝的役割は考えにくい。本遺跡で検出されている掘立柱建物跡との直接的な関係性は薄いと考えられる。むしろ、地形等に制約され構築されたものと考えの方が自然であろう。

#### 遺物

遺物は、古代のものとしては、内黒土師器、内赤土師器、底部ヘラ切りの坏などが少量出土している。土師器については小破片が多く、摩滅が著しいものが多数を占めたため、時期特定が出来ない資料が多数あったことを付記しておく。

先述したが、青磁、白磁、中国陶磁器、国産陶器などの出土傾向を見ると11c末頃から15・16cまでの遺物が多少のボリューム差をもちながら、まんべんなく出土している。

しかし出土する遺物の時期幅と比較すると、遺構はわずかに検出されているだけである。また、出土遺物量もそれほど多くない。これらから考えると、やはり遺跡中心を分断するように流下する小河川の影響で、当時の遺構や生活面は消失しているか、遺跡の中心は今回対象と

なった調査区の周辺で、小河川の影響を受けない場所に存在する可能性が高いものと思われる。

#### 参考文献

- ・中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号
- ・本田道輝 1993 「鹿児島県下の弥生後期土器」『鹿児島考古』第27号
- ・中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・太宰府市教育委員会 2000 「太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編」『太宰府市の文化財 第49集』
- ・鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007 「持鉢松遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)』
- ・鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 「上水流通遺跡2」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)』
- ・南九州市教育委員会 2009 「馬場田遺跡」『南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』
- ・鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 「芝原遺跡3」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(170)』
- ・鹿児島県立埋蔵文化財センター 2016 「鍛冶園遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(187)』

# 写真図版





①発掘調査風景 ②H-2～4区東側土層断面

発掘調査風景及び土層断面



①



②



④



③



⑤

①G・H-3区Ⅲ層遺物出土状況 ②1号土坑検出状況 ③1号土坑完掘状況 ④2号土坑検出状況 ⑤2号土坑埋土断面及び遺物出土状況

遺物出土状況及び縄文時代の遺構



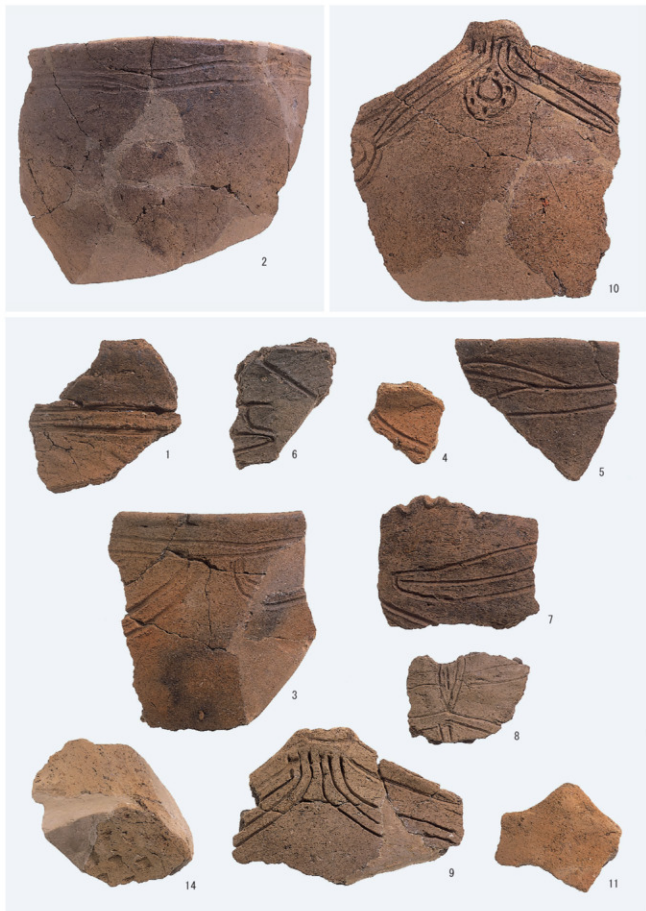
①成川式土器(壺)出土状況 ②成川式土器(壺)出土状況(断面) ③H～J-7～10区IV層上面ビット検出状況  
④G・H-16・17区掘立柱建物跡2号出土状況

成川式土器出土状況及び遺構検出状況(1)

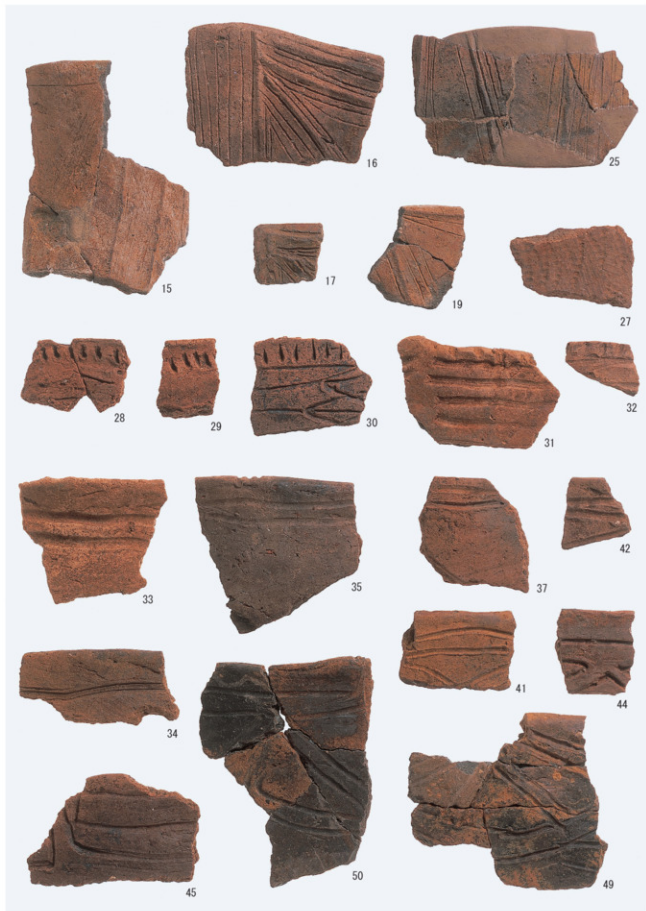


①獨立柱建物跡1号完掘狀況 ②3号土坑完掘狀況 ③5号土坑完掘狀況 ④6号土坑完掘狀況 ⑤7号土坑完掘狀況 ⑥溝1·2様出狀況

遺構検出狀況(2)



2号土坑内出土遗物



縄文時代の遺物（1）



縄文時代の遺物（2）



縄文時代の遺物（3）





縄文時代の遺物（４）



縄文時代の石器



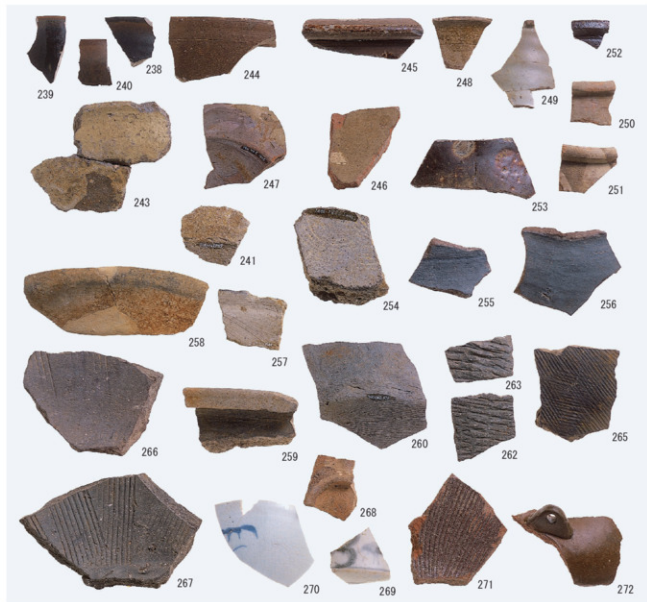
弥生時代～古墳時代の遺物



古代～中世の土師器



中世の青磁・白磁



中世～近世の陶磁器及びその他の遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(189)

## 高付遺跡

発行年月 2017年3月  
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318  
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2-1  
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821  
印刷 株式会社イースト朝日  
〒891-0122  
鹿児島県鹿児島市南栄3丁目30-7  
TEL 099-266-5522 FAX 099-266-5523



鹿児島県